



十字架の森



スワプナ

目次

1	1
2	7
3	12
4	19
5	25

青い空に白い雲、船尾には白波が広がり遠ざかる。頭上では、海鳥がギャーギャーわめいている。うっすら見えていた島が、だんだん大きくなり、その色を濃くしていく。ああ、なんて空しいんだ。夏休みだというのになんて不幸なんだ。これもタバコを吸ったのがいけなかった。いや、吸っているところを見つかったのがいけなかった。

昼休み、弁当を平らげた後、人気のない物置小屋の裏でタバコを吸うのが日課だった。この秘密の場所を知る者はなく、これまで誰も近づきもしなかった。私はそんな静かな空間で空をながめながら、のんびりとタバコをふかしていた。ガラにもなく、人生なんかをぼんやり考えていたのがいけなかったかも知れない。突然、生活指導の女教師が現われ、ヒステリックに騒ぎ立てた。これが運の尽きだった。

最悪のことも考えたが、なんとか一週間の自宅謹慎ですんだ。しかし世の中はそれほど甘くはない。それには厳しい条件があった。その条件とは新しく創設されたラクロス部に入部し、三年生の引退の日まで休まず積極的に練習に参加するというものだった。

基本的に私は汗をかくのが嫌いだ。学校の行き来さえ億劫に思うほどだ。それがあと一年も身体を動かし汗をかけという。おまけに積極的にときている。貴重な高校生活をそんなので棒に振るのは拷問に等しい。かといって退学になって、教師たちを喜ばせるのも癪だ。親を発狂させるのも面倒だ。そんなわけで、渋々ながら私はその条件を飲むことにした。

しかしラクロス部に入部することで、なぜ処分が軽減されるのか。後でわかったのは、顧問である広島が助け舟を出してくれたということだった。生徒に無関心である彼が、なぜ私を助けようとしたのかそれが不思議に思えた。部員が不足していたというわけでもなく、教師としての使命感に突き動かされたとも思えない。やはり謎である。退学を主張した他の教師たちも、広島がきびしく監督し指導することを条件に、最終的には折れたという感じだ。

顧問の広島は生物担当の教諭で、三十を一つ二つ過ぎた独身。浮いた話は聞こえてこない。どことなく野暮でぱっとしないが、それでいて生徒たちには多少だが人気があったりする。そんな彼は、今年の四月にできたばかりの女子ラクロス部の顧問を押し付けられた。

そのラクロスとは、クロスと呼ばれる先に網のついたスティックを用いて、直径六センチの硬質ゴム製のボールを奪い合い、相手陣のゴールに入れることで得点を競い合う。

試合時間は前半後半とも二十五分間、チーム十二人ずつのプレイヤーで行われる。もとは北米インディアンたちの間で行われていた闘技で、木や岩などをゴールとし、一チーム百人以上が一メートル前後の棒を使い、木や鹿皮に鹿の毛をつめたボールを追いかけ繰り広げられていた。ゴール間の距離が数キロにも及ぶこともあり、二日や三日かけて行うこともあったという。

練習には一切関わろうとしない顧問だったが、そのときは部員たちの強い誘いを断り切れず、ミニゲームに加わることとなった。部員みんなは顧問が運動音痴だということを見抜いていたが、当の本人だけはそれに気づいていないようだった。案の定、はじまって何分もしないうちに、顧問は自身の持つクロスに足を引っ掛け、派手にすっころんだ。その無様さに、他の部活を含めグラウンドにいた全生徒が爆笑に湧いた。顧問は自分が運動音痴だということを強く自覚したはずだ。

それからというもの、いくら挑発しても、逆におだてても彼は二度とクロスを持つとしなくなった。生徒たちに爆笑され、相当傷付いたのだろう。そのとき痛めたのか、顧問はしばらく右足をかばうよう歩いていた。もしかすると、生徒たちに失笑されるのが嫌で、そうすることで同情されようと演技していたのかもしれない。

「いい加減にあきらめなさい。ここまで来て往生際が悪いよ」 キンキン声がビシヤリと私の背中を叩く。振り返ると、ババが右ほほ上げほくそ笑んでいた。「あんたの考えはわかってるよ。逃げ出そうたってそうはいかないからね。まあ、覚悟してなさい。こっそり絞ってあげるから」 そう言うと、ババは高笑いし去って行った。

この馬場山真知子との関係は、不幸なことに幼い頃よりはじまる。幼なじみというやつである。言わばガキ大将的である彼女と、一匹狼的な私とは水と油のような関係で、ことあるごとに対立し諍いあっていた。そのうち一対一の決闘になると見越した私は、柔道を習う中学生の従姉妹から、必殺技を習い密かに特訓した。

それから約一ヶ月後、やはりその時がやって来た。きっかけはたわいのないことだった。罵り合いから、やがてはつかみ合いとなった。熱くなりながらも頭の片隅で冷静さを保っていた私は、すぐさま従姉妹より伝授されたこの技を繰り出した。自ら後ろに倒れながら相手を引き込み、その腹部に足をかけて投げ飛ばす。不意をつかれたババは顔面から砂場に突っ込んだ。必殺の巴投げがみごとに決まった。何が起こったかわからない彼女は、顔を砂だらけにし呆然としていた。勝負ありだった。私は右手を突き上げ、勝利の雄叫びをあげた。ババはこの日よりさらに性根が悪くなり、前より増して私を目の敵にするようになった。

そのババがなぜラクロス部の部長となって威張っているかということ、それは彼女がこの部を誕生させたからに他ならない。色気づいたババが、男子に注目されるにはどうしたらいいかと考えたその答えがスポーツだったのだ。

スポーツといっても、華やかでスタイリッシュであることが絶対条件だ。しかしすぐに名が上がるような、人気競技であるバレーやテニスやバスケットなどは、ババごときの素人が入部したからといって、そうそうみんなと肩を並べられるはずがない。部員たちは小中学生のころから始めたものがほとんどで、その実力の差は天と地ほどにある。

実力があってこそ、その存在が輝く。実力がなければ、大勢の中のただのくすんだ一部員でしかない。存在感のないただの補欠に、男子の熱い視線が送られるなんてことはあり得ない。ババもそのくらいはわかってたはずだ。そこでそれらに替わる華やかで

スタイリッシュな競技はないかと模索したのだ。

そこで目を付けたのがラクロスだったというわけだ。ラクロスはまだそれほど広く普及されていない。部として活動する学校もそう多くはないはずだ。それに他校との実力もそれほど差はないに違いない。いまからでも十分目立てられるかもしれない。なにより、競技としてこれから注目される可能性は高い。ポロシャツにミニスカートの女子が、手にしたクロスでボールを取り合い走り回っていたら、通りすがりの男子も思わず足を止めてしまうはずだ。着ているユニホームだけで、そうでもないのにかわいく見えてしまう。

市議会議員でもあるババのじいさんは、この辺りではそこそこの顔だ。当然、我が校にも強い影響力を持つ。学校側も機嫌を損ねるようなことはしない。そういったわけで、ババのラクロス部は新しい部としてすんなり承認されたわけだった。

そんな女子ラクロス部はこの夏休みに強化合宿を行うということとなった。合宿なんかで掛け替えのない夏休みを無駄にしたくはなかったが、私の弱い立場ではどうすることもできず、泣く泣く参加することとなった。合宿地は顧問の生まれ故郷の伊佐良井島だという。名前からして辺鄙な田舎だと想像できる。たぶん信号や横断歩道なんてものはなく、道ばたには野良ウシや野良ヤギなんかのさぼっているのだろう。

連絡船には乗船客もそれほど多くない。目に付くのは数えるほどだ。ベンチでうなだれている男子三人組は、私たちと同じ年頃だろう。よれよれのポロシャツにジャージのズボン、大きなバッグをそれぞれの足元に置いている。どこか挙動不審に見えるのは気のせいかな。ナンパ目的で来たが、乗る船を間違っしょぼくれているといった感じだ。見るからに垢抜けていない。サル、ブタ、カップ、まるで西遊記の子分たちみたいだ。

また、二十代前後と思われる女子大生風の若い女性は、見るからにこの場には不似合いな感じがする。一人というところを見ると、夏休みで帰省するところなのだろう。白無地のTシャツ、はきこなしのブルーのジーンズ、山登りでもするかのような大きなリュック。ワイルドな感じだ。

そして、サングラスの二人は、殺し屋二人組といったところか。この暑いのにダークスーツというスタイルが、余計に人相の悪さを際立たせている。ああいう輩には近付きたくない。

潮風に飽きてしまった私は、タバコを吸いに駐車スペースに降りた。何ごとも我慢は身体によくない。ふと見ると、さきほどの殺し屋二人組がいる。こんな人気のないところでこそこそ話すなんてあやしい。どっちが相手を殺るか、相談でもしているのか。

そんなこと思いながらタバコをくわえようとしたとき、いきなり口をふさがれた。仲間がもう一人いたのかと、私は全身が恐怖で固まる。「さわがないで」背後から声を殺して言う。それは聞き覚えのある声だ。

私はその手を引き剥がしてふり返った。やっぱりそれは前田サキだった。彼女は真面目な顔して「しいー」と人差し指を立てる。そしてそばのワゴン車にへばり付くと、そ

の陰からそっとのぞく。釣られて私も同じようにしてのぞき見る。しかし殺し屋二人組は私たちに気づいたのか、もうそこにはいなかった。

「やっぱりやつらは殺し屋?」「そんなわけないでしょ。あんたのおかげで台無しだわ」

サキはそう言って、さっさと階段をあがって行った。何で私のせいなんだ? 何が台無しなんだ? なんのことやらさっぱりわからない。

サキみたいなタイプは大嫌いだ。自分勝手に傲慢で、いいかげんで人の迷惑も省みない。こういうやつにかぎって要領がよく、自分だけがいつもいい目を見る。その陰で犠牲になり損をするのは私のような正直者と決まっている。サキは私と同時期にラクロス部に入部した。こんな部に自ら希望して入るとは、かなり変わっている。そんなやつとうまくやっていけるわけがない。みんなに合宿をたき付けたのも彼女だ。そして顧問の生まれ故郷を合宿地にと強く押したのも彼女だ。まったくもって余計な事をしてくれる。

タバコを吸い終え甲板にもどると、サル、ブタ、カップの三人組みにサキが言い寄られていた。いい気味だと思ったのも束の間、彼女が大口を開けて笑い出した。どうやら息投合してるみたいだ。どう見てもサキの方に主導権がある。たぶん言い寄ったのは彼女の方だったのだろう。助けてやろうかなどと、ほんの少しでも思ったことを後悔した。

埠頭には、カッターシャツのチビ男と、目つきの悪い制服警官が出迎えに来ていた。背広のチビは町役場の職員で、制服警官は合宿所の近くの駐在だと紹介された。彼らは顧問の小、中学校の同級生らしく、三人は再会を喜び合っていた。駐在所勤務の緒方は、融通のきかなそうな強面。町役場職員の田所は、一見親切そうだが眼鏡の奥の目は冷ややかだ。二人とも油断ならない感じがする。町役場が用意したという小型バスで合宿所に向かった。彼らと顧問は移動中、積もる話とかで盛り上がっていた。この島では警察も役場もそうとう暇なのだろう。

合宿所となるのは大秦寺という思ったより大きなお寺だった。長い石段をのぼり、山門をくぐるその先にりっぱな本堂があった。私たちはそこでこやかな住職の説法を聞かされたあと、チクリンとかいう若い坊さんに寺内の案内をされた。みんなが死んだ魚のような目をしている。反応も薄い。私も興味はないが、しかたなくその後が続く。

嬉々として説明を続けるチクリン坊によれば、七堂伽藍は大きな七つの建物が基本になっているという。本堂にはご本尊の薬師如来がまつってあって、多くの人がお参りに来るのだそうだ。そのほか、講堂や五重塔など。経堂には五千四百巻ものお経が納めてあるという。鐘楼は釣鐘堂のことで明けの鐘と暮れの鐘を打つ。「食堂」と書いて「じきどう」と読み、見てわかるように食事をする場所である。僧坊とは坊さんが寝起きするところで、もちろん風呂もトイレもある。私たちは大広間に通された。どうやらここで寝起きするようだ。駐在と町役場は、住職とたわいのない世間話をしたあと帰って行った。顧問と住職も二人してどこかに行ってしまった。

夕食後、みんな集められミーティングが行われた。練習のスケジュールや、起床と就寝時間、食事、入浴のことなど、細かい説明や注意事項が話された。私はそんなことよりも、どうやって練習をさぼるかで頭がいっぱいだった。就寝時間は九時だ。小学

生じゃあるまいし、そんな早くから寝られるわけがない。ほんとは枕投げでもして騒ぎたいところだろうが、そんなことが許されそうな雰囲気ではない。みんな布団の中でおとなしくしている。

私は足を忍ばせ大広間を出た。暗い中、廊下の軋む音を気にしながらこっそり裏口から抜ける。外は少しひんやりとして涼しい。誰もいないし気持ちがいい。空気も澄んでいる。本堂の裏は墓地になっていて、広い敷地に墓石がずらりとならんでいる。月の明かりに、まるで生き物のようにその群が浮びあがっている。肝試しにはよさそうかもしれない。

それにしてもまったく音がない。こうしていると木々や墓石に意識があり、こちらをうかがっているように思えてくる。物の怪なんかはその辺に潜んでいそう。そんなことを考えているうち、だんだん怖くなってきた。引き返そうと踵を返した瞬間、すぐ目の前に不気味に笑う女の顔があった。驚きのあまり私は悲鳴もあげられず、その場にへたり込んでしまった。不気味なその女は、仰け反って大笑いする。そのイラつく笑い声にはやっぱり聞き覚えがある。

「いいかげん、顔から懐中電灯を外せよ！」私は声を荒げた。サキはよっぽどおかしかったらしく、こんどは苦しそうに身をよじっている。「驚かすんじゃないよ。心臓が止まる場所だったじゃないか！」まだショックの残る私はヨロヨロと立ち上がった。「あんたは心臓に毛が生えているから平気だと思ったわ」サキはまだ笑っている。

「それより一人でどこ行く気？」「こんな時間から寝られるわけないから、その辺をちょっと散歩するだけだよ」「起床は五時だからね」「五時なんていつ決めたんだ。ラジオ体操でもそんな早起きしないだろ」「ミーティングでスケジュールのこと言ってたじゃない。聞いてなかったの？」「聞いてなかったのじゃなく、聞かなかったんだよ」「ロードワークと軽い練習からはじまって、朝食まで坐禅」「坐禅？みんな坊さんになりに来たのか？」「そんなわけないでしょ。あと境内の掃除とかもあるからね。スケジュールを張り出してるから見てた方がいいんじゃない」「夕食は素っ気なかったけど、もしかして合宿中ずっとああいうの食わされるのか？」「そうだと思うよ。自慢の精進料理らしいから」「冗談じゃない。育ち盛りの乙女があんなもんで満足できるわけじゃない」

「しっ！」不意にサキが懐中電灯を消した。サキは身動きせず、周囲をうかがう。風に乗って微かな声が聞こえてくる。そちらに目を凝らすと、大きな木の下に影が二つ見える。私は氷水をかけられたように背筋が寒くなった。影の大きい方がこちらに向いた。私とサキは墓石にへばりつき身を隠す。風に木々の葉がざわめく。足音は聞こえない。こちらに来る気配もない。私はそっとのぞき見た。するとそこにあった二つの影はすでになかった。

「今の何？」「あれはオバケよ。間違いないわ。お寺なんだからオバケの一人や二人いてもおかしくないもの。あれは絶対にそうよ」そう言うサキだが、ぜんぜん怖がっている様子はない。サキは超常的現象を怖がらない性質なのか。それとも単なるバカなのか。「ねえ、散歩しない？」サキが言う。何もなかったように、あっけらかんとしている。こいつはいったいどういう神経をしてるんだ。やっぱりバカなのか。私は無視してタバコに火をつけた。「ねえ、散歩しようよ」「いいよ」私はタバコの煙を長く吐く。サキは笑顔になると私の腕を組んで歩き出した。私は断ったつもりなのだが、彼

女はそれを肯定的な意味にとらえたようだ。

「まったくどこ行くんだよ」「来ればわかるよ」　サキは意味ありげにニヤリとした。都会と違って空が墨をこぼしたように真黒だ。大きな星が今にもこぼれ落ちそうに瞬いている。田んぼのカエルと草むらの夏虫の鳴き声だけがやかましく、あたりは静寂に包まれている。まばらな民家の明かりも消え、闇だけが広がる。薄暗い街路灯が場違いのようにぽつんと点っている。

やがて波の音がしてきた。浜辺の松林が暗闇にそびえている。サキは私の腕を引いて砂浜におりた。漆黒の海は、近づくと今にも吸いこまれそうだった。寄せては返す波の音だけが闇の中から吠えつけていた。砂浜に小さな明かりが見え、テントがひとつぽつんと立っているのがわかる。すると我々に気づいた人影がすくっと立ち上がった。

嫌な予感がした。そしてその予感の的中していた。それは連絡船にいたサル、ブタ、カッパの三人組だった。「左から時田くん、竹尾くん、雨宮くん」　サキが彼らを紹介した。中肉中背の時田は、無口で影が薄く、どこかたよりない。小太りの竹尾は、無神経でおしゃべりだ。人のことを考えないところはサキと似ている。長身の雨宮は、いちいち言うことが理屈っぽい。疲れるタイプだ。みんなダサイ坊主頭だ。

サキは彼らと今日知り合ったとは思えないほど親しくなっている。「ここだけの話だけど——」サキは声をひそませた。「この島のどこかに海賊の宝が隠されているって言い伝えがあるの。あの岬に誰も立ち入らない秘密の洞窟があるんだけど、私はそこに隠されると思うの。だからいっしょに、宝探ししない？」サキはキラキラ目を輝かせる。

サキがなぜそんなにこの島に詳しいのか考えているうちに、みんなはその洞窟を探検しようということでもどまっていた。月明かりに波が静かに揺れている。切り立った岬の上には白い灯台が立ち、回るその灯光が、沖の小さな島影を浮かび上がらせる。「あの無人島は八十と書いてヤソ島といらしいわ。なぜ八十なのかかわからないけどね」サキが指差して言った。

入り組んだ岬の洞窟は、地獄への入口のようだ。カッパの雨宮が懐中電灯を照らした。中は思ったより大きく深い。空気はひんやりとして肌寒いほどだ。私たちは奥に向かって進んだ。洞窟はアリの巣のように幾つにも分かれている。

「どこかに野垂れ死んだ人がいるかもね」　ブタの竹尾がこんなところで無神経に言う。「白骨なんか転がってたりして」　乗ってサルの時田も声を震わせる。こいつらの目的はわかっている。怖がらせて、キャーとか言って抱きつかれるのを待っているのだ。下心が見え見えだ。「誰がいる」　カッパが足を止める。ちょっとしつこい。そんな手には誰も引っかけられない。「本当だわ、誰がいる」　サキの声が強張る。サキの顔が引きつっているのを見ると、もしかして本当なのか。それともサキもこいつらとグルで、ただ怖がらせようとしているだけなのか。

私は耳を澄ます。するとかすかに話し声が聞こえてくる。人のことは言えないが、夜中にこんなところに来るなんてふつうではない。私たちは懐中電灯を消し、岩陰に隠れた。すると足音とともに二人の男が現われた。男が持つ懐中電灯の灯りで一瞬その顔が見えた。それは連絡船に乗っていた二人組みの片割れだ。

「彼らは海賊の宝を探しに来たんだわ。連絡船で見たときから怪しいと思ってたのよ」サキが声をひそめて言う。「後をつけるのよ」「見つかったらどうするんだよ。それに迷っ

たら出られないよ」 私は彼らを追おうとするサキの腕をつかんだ。 そのとき、彼らが振り返って懐中電灯を照らした。私たちは岩陰に身を隠す。

二人の男はしばらくあたりを調べたあと、さらに奥の方へと進んで行った。「挙動不審だわ、あの二人。やっぱり怪しいわ」 サキは興奮を隠せない。

2

「起きろ！」 ババの怒鳴り声が轟いた。 時計の針はまだ五時を指していない。起床の時間まで十五分もある。文句も言ってやりたいが、あとあと面倒だ。私は力を振り絞り布団を出た。

洗面をすませ境内に集まった。まだ太陽は出てないが空は十分明るい。準備運動のあと、山門を出てロードワークに出る。 長い石段を数段おりたそのときだった。私は背中に強い衝撃を受けた。 視界がぐるぐる回り、前に行く部員たちを次々と追い越した。最後まで転げ落ちた私は、すぐさま石段を見上げた。背中を押したのは誰だ！

みんな心配して駆け下りて来ると思った。だが違った。誰もが呆気にとられた顔をしている。少しでも期待した私がバカだったのか。みんなこんなにも薄情だとは思わなかった。

そんな中、ババだけがしっかりとした足取りで下りてきた。なんだかんだ言いながら、ババもそれほどの悪人ではない。普段は嫌味なことを言ったりするが、少しは人としての良心も持っている。ババだって時には頼りになるはずだ。 そんなババが言った。「練習をさぼろうとしても、そうはいかないから」 その一声は冷たく尖っていた。

ババを一瞬でも人として見ようとしたことを私は後悔した。やっぱりババに血や涙はない。 生まれつき頭は頑丈だ。頭突きで痴漢を撃退したこともある。ババはまるで私が頭を使っていないようなことをいうが、それは大きな間違いだ。頭突き以外にも頭を使うことはある。 文字通りただでは転ばない。おでこにタンコブをつくったが、たいしたことはない。しかしこれを口実に練習をさぼることができる。

大秦寺の下には、「はたや」という小さな民宿がある。この民宿は農園もやっていて、寺にも野菜などを届けに来たりするとか。 その民宿で軽トラックを借り、顧問の運転で診療所に行くことになった。頭も打っているので、あとあと後遺症にでもなったら大変だということなのた。私は心の中でニンマリと笑った。

「ほら、もうちょっとつめてよ」 助手席に座る私の横にサキが乗り込んで来た。「なんであんたが来んだ？」「私はマネージャーでもあるのよ。どんなに拙い部員でも、ケガしたとあっちゃあ、ほっておくことはできないでしょ」 そう言うと、サキはバタンと勢いよくドアを閉めた。 言い方にどこかトゲを感じるのは私の気のせいかな。 ぎゅうぎゅう詰め座席に肩をすぼめ縮こまる。顧問がエンジンをかけ、軽トラックはガタガタと動き出した。運動音痴の顧問だが運転は人並みにできるみたいだ。

「この島、ちゃんとした病院はないの？」 サキが言った。「あの霊宝山の裏側に、今はちゃんとした総合病院もあるよ」 顧問が左手をハンドルから離し指を差す。島のほぼ中央にひときわ大きな霊宝山がそびえ立つ。この山は入山禁止になっていて誰も立ち入ることはできないという。その総合病院に行くには、この霊峰山をぐるっとまわって行かなければならない。

「その昔は総合病院どころか診療所もなく、病気やケガをすると、わざわざ船で隣の島まで行ってたらしいんだ。それではあまりにも大変だということで、この小っちゃな診療所ができたわけだよ」「それまでは加持祈祷とかで病気を直そうとしてたとか？」 サキが揶揄する。「実はそういうこともあったみたいだ。それもそれほど遠くない昔まで」 顧問は高らかに笑った。

「先生は何歳までこの島にいたの？」 興味深げにさらにサキが訊く。「中学までだけ」「どうして中学まで？」「中学三年のとき父親が死んだんだ。この島には高校がないし、進学のこともあったから、母方の実家の方へ行ったんだ」

「そうなんだ。じゃあ、知ってるでしょ？ 海賊の宝」「海賊の宝？ さあ、僕は聞いたことないけど」「地主が殺されて宝の在り処を示した地図が盗まれたっていう話よ」 サキは表情を変えず言う。

いきなり話が不穏になり、私は驚いて横のサキを見た。「どこからそんなこと聞いたんだ？」 顧問は静かに言った。「あんまりそういうことには首突っ込まない方がいい」 そうたしなめる顧問の言葉は、おだやかだが有無を言わせない強さがあった。

診療所は古びた木造の建物だった。待合室には、数人のじいさんばあさんが診察を待っていた。人のよさそうな若い看護師さんが、ばあさんを診察室に案内して行く。木造の古い診療所は明るく清潔感があった。田舎だからか、どことなく暖かそうな雰囲気だ。病院らしくないところが感じいい。

「ほら、トウコ。あんたの番だよ」 サキが私の肩をゆすった。 どうやら名前を呼ばれたみたいだ。心地よくて眠くなってくる。顧問も腕組みをしたままうとうとしている。「ひとりで大丈夫だから」 私は長椅子から立ち上がろうとするサキを制して言った。「ダメよ。あんただでさえよくない頭打ってんだから、先生から言われたこと理解できないかも知れないでしょ」 サキは親切で言っているのかもしれないが、何か引っかかる。

診察室に入ると、若い医師がにっこり笑って迎えてくれた。医師は秦野だと自己紹介をした。サキがついて来た理由はもしかするとこれなのか。 秦野医師は彫りが深く精悍な感じがした。年齢は顧問と同じくらいだが、健康そうでいかにもスポーツマンといったところがまったく違う。

「君たちだね。合宿できている女子高生っていうのは？」 秦野医師は穏やかに言った。「どうして知ってるんです？」 サキが目を輝かせた。「知らない人はいないよ。この島は小さいからすぐに噂が広まるんだ」 医師はそう言って私のおでこを診る。「まだ練習しちゃあだめでしょ？」 私はさすがのように言った。

「まるで練習したくないみたいだな」 医師が失笑する。「明日も来なくちゃいけないでしょ？」 サキも懇願する。「心配なら来てもいいよ」 秦野医師は親しみのある微笑を

見せた。その後看護師さんが、ひじとひざの擦り傷と、おでこのタンコブに消毒液を塗ってくれた。右足には湿布薬を貼り、やさしく包帯を巻いてくれた。

合宿から抜け出すいい方法はないだろうか。病気になったと言っても、血も涙もないババには通用しそうにない。夜逃げなんてしようものなら、それこそ再起不能になるまで罵られる。宇宙人にさらわれたといっても、唯物主義のババは信じるはずもない。

そもそもババには夢がない。UFOやお化けどころか、ヒマラヤの雪男や、湖に生息する怪獣さえ信じていない。メルヘンとかファンタジーといった女子的なものが欠けている。書く文字は角張ってるし、角を曲がる角度も直角に近い。面立ちはどちらかというど角張ってるし、胸はペシャンコでずん胴だ。おまけに本人は自覚してないが、短足のガニ股だ。お化けもこんなやつには近づきたくないだろう。

「やっぱりここだ」 顔を出したのはサキだった。「脅かすんじゃないよ」 私はあわてて消したタバコの火をつけ直す。「私にも一本ちょうだい」 サキが手を出す。「あんたも吸うの？」 私はサキに一本出して火をつけてやる。「合宿を抜け出すにはどうしたらいいかなんて考えてたんでしょ？」 サキは吸い込んだ煙をふうと吐いた。彼女は妙に勘がいいところがある。

「でもよかったじゃない」「なんのことよ」「ケガしたおかげで練習さぼれるじゃない。これで宝探しに集中できるわ」「私はそんなのごめんだよ」「ここだけの話だけ——」サキは私の意思をまったく無視して言う。

「三ヶ月前、この島の地主が殺されているのよ。噂によると地主が殺されたとき、いっしょに宝の地図も盗まれたらしいの」「そんなこと言っても私は乗らないから」「連絡船に女子大生が一人乗ってたでしょ。彼女は弓月遙香と言って、地主の娘なの」 かまわずサキは続ける。「あんた、なんでそんなにくわしいの？」 私は訝しくサキを見る。サキは何も答えず、もったいぶるかのように、にやっと笑った。

「宝があったとしても、地図が持ち出されたんなら、もう見つけれられてるんじゃないの？」 イラつく私は声に怒気を込める。「たぶんまだ見つけれられてないわ」「どうしてそんなことわかるの？」「こんな小さな島だもの。何か運び出そうものなら、すぐ人の目について噂になっちゃうはずよ」

「宝といっても、私らには価値もない土瓶や茶釜かも知れないじゃない」「宝は金銀財宝に決まってるわ。それもまぶしくて目が潰れるほどのね」 妄想に取り憑かれたサキの目はギラギラしている。何を言っても無駄なようだ。こいつがこんな顔するときには特に危険だ。気をつけなければ、巻き込まれてひどい目に合う。

「ねっ、だから行こ？」「どこへ？」「昨日のところ」「私は行かない」「だって仲間じゃない」「ぜんぜん仲間じゃないし」 私はすかさず否定する。

「宝見つけたら一生遊んで暮らせるわ」「そんなものありっこない」 私はタバコの火を消し、立ちあがる。「どこ行くの？」「風呂」 私は振り返らず歩き出す。

僧坊の長い廊下を進む。いちばん奥に「大浴場」との墨書きがある。引き戸を開け脱衣所に入る。明かりは点いているが誰もいない。服を脱ぎ、洗い場へ通ずるガラス戸を開けた。湯に浸かり目を閉じる。やっぱり大きい風呂は広々して気持ちがいい。手足を伸ばしてくつろげる。部員たちから離れるとほっとする。私は深く息をついた。

するどガラガラとガラス戸が開く音がした。「入浴の時間はもう終わってるよ」サキの声だ。沸かし湯が大きく揺れ、顔にかかる。目と鼻を手で拭き目を開けると、湯気の中に不快なサキの顔があった。私は舌打ちし、再び目を閉じる。

「宝を手に入れれば、あんたでも男が言い寄ってくるかもよ」あんたでも、とはどういう意味だ。もっと言いようがあるってもんだろ。どうあっても私を仲間に入れようっていう気みたいだ。その理由がわからない。「今だから言うけどさ。私はあんたのこと助けてあげたんだよ」「なんのことよ」「あんたが物置小屋の裏でタバコ吸って、退学になりそうになったことがあったでしょ。あのとき私が顧問に頼んであげたんだから」

「意味がわかんない」「ラクロス部に入部するってことで、あんたは退学を免れたってことよ」「あれはあんたの差し金だったのか。あの顧問がそんなお節介するはずないと思ってたけど。こっちはこんな部に入れられていい迷惑だよ」「でも退学になるよりは、よか……」しゃべっている途中で、急にサキが黙り込んだ。

腹痛でもおこしたか。不思議に思って見ると、サキの顔が恐怖で強ばっている。そのサキの視線をたどると、窓の外の間暗闇に二つの目があった。私は息を呑んだ。サキは大きく息を吸い込み、爪で磨きガラスを引っ掻くような悲鳴をあげた。

表で薪が転がる音がしたかと思うと、何者かが慌ただしく駆けて行った。「のぞきよ。とっつかまえて！」サキが叫んだ。私は洗い場から飛び出す。脱衣所の脇に出入りする戸口がある。三和土の下駄を突っかけ、鍵を外して表に出た。

うら若き乙女の入浴をこっそりのぞくとは不届きなやつ。ただでは済まさない。まだその辺にいるはずだ。逃がしてなるものか。澄み渡った空に明るい月が出ている。私は月明かりに目をこらす。すると鐘楼の前を黒い影が走り抜けた。

「そこだ！」私は履いていた下駄を手に取り、大きく振りかぶって投げた。下駄は弧を描き、のぞき魔めがけて飛んでいく。コンと小気味よい音がして、その黒い影が後ろに仰け反った。

だがのぞき魔は下駄の痛打に怯むことなく、頭部をさすりながら森の奥に消えて行った。森は樹木が鬱蒼と繁り、闇の中にある。明るい月の光であってもその奥までは照らさない。懐中電灯なくして追うのは困難だ。

「ちくしょう！」私は月空に吼えた。「ちょっと、あんたケガ人なんですよ」走って来たサキが言った。そうだった。元気なところを見られたら練習をサボれなくなってしまう。この騒ぎに気づいていないのか、幸い誰も外には出てきていない。私はほっと胸を撫でおろす。

「それにいくら合宿っていったってその格好はどうかと思うよ」サキはバスタオルを私に投げた。私は自分の姿に気づいて急に赤面する。のぞき魔を追いかけることに必死で、何も着けていなかった。

サキはというと、ちゃっかりTシャツに短パン姿だ。私にのぞき魔を追わせ、自分はしっかり着衣していたというわけだ。「ケガが嘘だってことは誰にも言わないから安心して」

サキは満面の笑みを浮かべた。その勝ち誇った笑みの意味するところは、言わずともわかる。

洞窟はかなり深くまで続いている。いまましい悪路は、いくつにも分かれて入り組んでいた。まるで迷路のようだ。

気がつけばなぜか私が先頭を歩いている。ふつうこのような場合、男子が身を挺して女子を守ろうとするものではないのか。ところが、サル、ブタ、カッパときたら、サキの背に隠れるようにして固まってついて来る。

人数は多いほうが心強いかと思い、強引にこいつらを連れてきたが、頼りなさ過ぎて逆に不安になってくる。むやみに悲鳴を上げたり、いきなり逃げ出したりしたら容赦なくぶん殴ってやる。

「昨日の人たちは宝を探してたのかな？」 私は振り向いて言う。「その可能性はあるかも知れないよ。だとすると、地主を殺した犯人っていうことも考えられるわ」 サキはさっさと歩くとばかりに、手荒く私の背中を押す。

「それなら地図を手に入れてるはずだから、宝はもう見つけ出されているんじゃない？」 「いいえ、その地図は暗号になっていて、それを解読しないと宝の在り処がわからないのよ。どちらにしても彼らの正体と行先を突き止めなきゃね」「あんたそんな思いつきみたいなこと言わないでよ。まったく正気で言ってるの？ 見つかったらこっちまで殺されちゃうかもよ」「平気よ。彼らは必ずまたここにやって来るはず。私たちはただ彼らの後をつければいいのよ。そして宝はいただきってわけよ」 サキの高笑いが洞窟の天井に響きわたる。こいつ、完全に欲に目が眩んでいる。

確かに昨日のあの二人はあやしかった。サキが言うように、この洞窟には何かありそうな気がする。そのとき懐中電灯の明かりが、異様なものを照らし出した。思わず私は足を止める。サキが背中に頭突きした。サル、ブタ、カッパも止まり切れず申しかかってきた。

しかし誰も文句を言わない。それどころではない。みんな目の前のものが、ふつうではないと直感している。横たわった大木とは違う。等身大の人形なんかでもない。人だ。人が倒れている。ピクリともしない。

「し、死んでるんじゃない？」 サキの声が震える。カッパが恐る恐る近づいた。彼の表情が凍り付くのがわかった。黒いスーツでわからなかったが、背中に刺された跡がある。まわりには赤黒く固まった血が広がっている。サキが脳天を突き抜けるような悲鳴をあげた。それは洞窟内に反響し、悪魔があざ笑ってるかのように幾重にもこだました。その瞬間、私の理性がぶっ飛んだ。

すでにサキは逃げ出している。サル、ブタ、カッパもその後が続く。みんな自分のことしか考えていない。私も一目散に逃げ出した。その辺りにまだ犯人が潜んでいるかもしれない。

殺されてた男は昨日の二人組みのうちの一人だった。年齢は三十から四十歳。身元がわかる物は何も持っていなかった。死因は刃渡り約十五センチの刃物による失血だった。凶器は登山ナイフだろうと言っていた。死んでからは丸一日が経っているということだ。

昨日洞窟で、私たちは二人の男を目撃している。犠牲者はその一人に違いない。彼といっしょにいたもう一人の男が犯人なのではないか。私たちが目撃した直後の犯行かもしれない。

ありがたいことに、この辺鄙な島でも携帯電話が使えた。通報すると五分もしないうちに、駐在が血相を変えて走って来た。そのあとすぐ、大勢の警官が砂浜を駆け足でやって来た。車両が入って来られないとはいえ、どこかマヌケな光景だった。

そこを動かすと言われたのを真に受けて、バカ正直にも私たちは警察の到着を待っていた。さっさと立ち去ってればよかったものの、あまりにもショックが大き過ぎて思考回路がショートしてしまっていた。私たちは現場に案内させられ、そのあとあれこれ聴取された。駐在が知らせたのか、顧問が渋い顔で迎えに来た。てっきり叱られると思ったが、顧問はやれやれといった感じでため息をついただけだった。

3

大秦寺の自転車を借りて診療所に向かった。ペダルを漕ぐサキが代われとうるさいが、怪我人だからと私は素っ気なく断った。のんびり鼻歌交じりに、素朴な景色を眺めていると、あっという間に診療所に着いた。自転車が停まるが先に、私は荷台よりひらりと飛び降りた。「あんた、人前でそういう身軽なことするのはやめてよね。診療所に来なくていいってことになっちゃうから」サキが額の汗を拭いながら息を弾ませ言う。付き添いをいいことに、やっぱりこいつもサボるのが目的のようだ。

「ちょっと、見て」サキが私の袖を引っ張った。診療所の裏の木陰で、看護師と町役場がこそそ何か話している。「あの二人何やってるのかしら？」町役場のやつ、おどおどして挙動が不審だ。明らかに人目を気にしている。「町役場、看護師さんをデートにでも誘おうとしてるんじゃないの？」なんでもお見通しだと、サキがふっと笑う。「あの春日友利子って看護師さん、なかなかの人気みたいよ」確かに看護師さんは素敵だ。性格もよく、明るく、やさしい。同性から見ても好感が持てる。若い男にすれば、意識しないでいられるわけがない。それにしても町役場もすみに置けない。見た目と違って、かなり思い切ったことをする。他の男たちがこのことを知れば、黙っていないだろう。ひょっとすると熾烈な争奪戦が始まったりするかも知れない。

サキはずうずうしく診察室までついてきた。どうやら看護師さんのことを観察しているようだ。町役場はあえなく玉砕したに違いない。私は看護師さんの様子を見てなん

となくそう思う。サキもそのように感じているのではないか。「頭も、足ももう大丈夫だよ」 秦野医師が笑顔で言った。「ダメよ！」 サキが叫ぶように言った。「足はともかく、頭なんか後遺症が残ったら大変だわ。ただでさえ頭がおかしいのに、街中で人でも襲ったらどうするのよ。そうなったら先生の責任なんだから」 言うに事欠き、頭がおかしいとはどういうことだ。ふだんから私は、こいつにそういうふうに見られているのか。診療所に通い続けるための方便だとしても、もっと言い方というものがあるはずだ。「ところで先生は島の人？」 サキの話がコロッと変わる。文句の一つでも言ってやろうとした私は、肩をすかさされたようになり椅子からずり落ちそうになった。「いや、僕は東京だよ」「東京？ なぜこんなところ来たの？」「この島の自然に魅せられたのかな。空といい、山といい、海といい、空気といい、東京とはまるっきり違う。こっちは自然の息吹っていうか、強い生命力みたいなものを感じるんだ」「へえ、こんなど田舎を好む物好きも世の中にいるんだ」 私は素直に関心する。「この島、どこかキリスト教の匂いがするように思うんだけど、先生はどう思う？」 またサキが突飛なことを言い出した。いったい何を企んでいるのだ？ サキの鼻は本当にキリスト教の匂いを感じるのだろうか。もしそうなら耳鼻科に行ったほうがいい。「どうだろう？ この伊佐良井島にキリスト教の教会は一つもないし、信仰があったとする遺物めいたものも存在しない。僕の鼻もキリスト教なんて匂い全然しないけどね」「霊宝山の山深い奥にはその当時の十字架がまだ残っているって話よ。遙か大昔、この島の人たちはみんなキリスト教徒だったんだと思うわ。それがいつのころか、何かの理由で仏教に宗旨変えた。その謎を解く鍵は、霊宝山の十字架にあるんだと思うわ」 サキは何かに憑かれたようにしゃべった。医師と看護師は、ただ苦笑して見ている。サキの妄想は他人を巻き込み、そして不幸に導いていく。

部員たちにも殺人事件のことが知れわたっていた。就寝前の自由時間には、そのことで持ち切りになっていた。私とサキはそんな彼女たちが寝静まるのを待ち、合宿所を抜け出した。やめろと言われればやりたくなる。いつの世もそれが年頃の少女の常だ。

私とサキは、サル、ブタ、カッパと合流し、崖を登り、川を渡り、林を抜け、鬱蒼とした森に入った。心細い獣道をたどっていたが、しばらくすると生い茂る草木にそれも呑み込まれてしまった。森はどこまでも深くなっていく。頼りの月の光も、ここまで来ると立ち並ぶ大樹に遮られてしまった。物陰から、クマやオオカミが飛び出して来そうな雰囲気だ。日本のオオカミはとっくに絶滅したと言われるが、そんなのわかったもんじゃない。木の幹に印をつけながら来たものの、無事に帰れるかどうか心配になってきた。今どの辺にいるのかもわからない。サキの脅しなんか屈せず、最後まで拒否し続ければよかった。野垂れ死にするよりは、まだみんなから批難される方がましだ。今更ながら後悔する。

「見て！」 突然サキが声を大きくした。しゃがんだサキをのぞくと、そこにまだ新しいタバコの吸殻が落ちていた。それは最近、誰かがここに来たということに違いない。「犯人のものかも知れないわ。もっと先に行ってみましょ」 サキが顔を上げ、森の奥に

目をやる。「犯人がいたらどうするの。みすみす殺されに行くようなものじゃない」「大丈夫よ。こっちは五人だし、私たちはまだ相手に知られていないわ」

「誰がいる！」 カップが声をひそめ鋭く言った。 樹葉からもれる月明かりが、黒い影をうっすら照らしている。黒い影はしゃがみ込んで何かをしている。 私たちは茂みの陰からその様子をうかがった。相手はまだこちらに気づいていない。「こんなところで何やってんのかしら？」「何か掘ってるみたいね」「埋めてるのかも知れないよ」「財宝かな？」「あれはたぶん殺された男の片割れよ」「どうする？ 捕まえる？」「危険よ。相手は殺人犯よ」「じゃあ、どうする？」「ちょっと声が大きいわよ」 そのとき、黒い影がこちらを向いた。 気づかれた。私もサキも凍り付く。サル、ブタ、カップも固まる。すると黒い影は、ブヒ、と甲高く叫び、体勢を低くしたまま走り去った。

「もしかしてイノシシ？」 私はそっと言った。黒い影が走り去った方向を呆然と見ていたみんなの視線が一斉に私に向く。「やつは何をしていたのかしら？」 サキはそう言いながら、イノシシのいた場所に向かう。つられてみんなもその後が続く。 見るとそこには三十センチほどの穴が掘られていた。「イモとかトウモロコシとか、ほかの獣に盗られないよう隠してたんじゃない？ 誰か掘ってみてよ」 サキはそう言いながら、いちばん近くのサルを見る。 サルはあきらめたように小さく息をつく、足下に落ちている小枝を拾った。

「イノシシのやつ、けっこう深く掘ったものね。かなり用心深いやつだわ」小枝で土を掻きはじめたサルの横に、サキが膝を抱えてしゃがみ込む。「あのイノシシ、どこかから見てるんじゃない？ 仲間集めて襲って来たりしないかしら？」 私は心配になり辺りに目を配らせる。「そしたら返り討ちよ。鍋にして食ってやるわ」 サキはサルの手元から目を離さず言う。

「何かあるみたいだ」 サルが手を止めた。 ブタがペンライトの光を照らした。土の中から何か出ている。 私はその異様なものの輪郭をなぞる。するとはじめ認識できなかったそれがなんなのか、はっきりとしてきた。

その瞬間、みんなの悲鳴が一斉にあがった。それぞれの顔は恐怖で強ばっている。 土の中から出たものは、うつろな目をした男の顔だった。 犯人はイノシシではない。埋めたのももちろん違う。 二度も死体を発見したとなると、いくらなんでも具合がよくない。事情聴取も長ったらしくなりそうだ。なぜあんな場所に行ったのかとか、また根掘り葉掘り聞かれる。いくら温厚な顧問でも、二度目となると黙ってられないだろう。

ブタが声を変え、公衆電話から警察に通報した。もちろん名前は名乗らず、事実だけを伝えてすぐに電話を切った。

死体は、殺された男の片割れだった。死因はやはり刃物による出血死だった。その男も身元がわかるものは何も持っていなかった。 死後二日だと言う。驚くことに、洞窟で発見された男より先に死んでいる。この男は二日前に殺され、埋められたということだ。

そうなれば、洞窟にいた第三の人物は誰だったのか。その人物が俄然あやしくなる。

現場に足跡が残っていたらしい。足跡は男性用のゴム製の長靴で、サイズは二十六センチだとわかった。 しかし、この島には同じ長靴が至る所で使われている。駐在所に警察署、町役場に公民館、民宿にホテル、私たちが寝泊りしている寺にだって同じものがある。そしてサイズにしてもありふれている。これではどうしようもない。落ちて

いたタバコの吸殻は被害者が吸ったものだった。その他に犯人に繋がるものは何一つなかった。それから警察は、犯人の長靴とは別に、イノシシと五人の人の足跡も見つけていた。

夕方、駐在が寺にやって来た。私とサキの二人だけが呼び出された。チクリン坊に通されたのはかしこまった和室で、中央に大きな座卓が置かれてある。座卓をはさみ、駐在と向かい合う形で座った。顧問がいっしょじゃなかったのは、もしかすると駐在の気遣いだったのかもしれない。

「電話は匿名だったが、また君たちだろうか？」 駐在が渋い顔で問う。「なんの何かしら？ 私たちにはわからないわ……、ねえ、トウコ」 サキがとぼけ、そして私を巻き込む。「嘘ついてダメだよ。あの現場に足跡が残ってたんだ。それを調べれば誰だかすぐにわかる」 不動の駐在がぐっと見据える。どうやら駐在をだますことはできなさそうだ。

「地主を殺した犯人と、今回の犯人も同一人物かしら？」 サキは正座の足を崩し、急に馴れ馴れしく言った。いままでのやり方では通用しないと、どうやら出方を変えたようだ。「そんなこと知ってどうする」「ねえ、教えて」 サキは手を合わせ片目をつぶる。「ふざけるんじゃない。そんなこと言えるわけがないだろう。これは殺人事件なんだ。面白がるんじゃない。こんどは君たちが狙われるかもしれないんだぞ」 駐在は強い口調で言った。悪人面してても正義感は強いと見える。

「でも駐在さん、看護師さんのこと好きなんですよ？」 虚を突かれた駐在は、一瞬ぼかんとしたあと、見る見るうちに頬を赤くしていった。ガミガミうるさいが意外と純情だ。自らその通りですと言ってるみたいだ。「な、なに、いきなりバカなこと言ってんだ」「教えてくれたら、こっちも情報教えてあげるわよ」「いい加減にしろ。それとこれとどう関係があるんだ」 口うるさいけど、駐在は案外いい人みたいだ。見かけによらず根が正直なのだろう。動揺するところが可愛らしい。「ぼやぼやしてたら、他の人に取られちゃうわよ」 私とサキはニンマリ笑う。やっぱり駐在は看護師さんに惚れている。

確かに駐在が言う事はもっともだ。警察にとっては目ざわりで迷惑だし、私たちに危険が及ぶ可能性だってある。かと言って、このまま引き下がるわけがない。何しろ女子高生は好奇心旺盛なのだ。合宿所はやはり昨夜の事件で大騒ぎになった。この寺の住職があやしいとか、どっちかというチクリン坊の方が犯罪を犯しそうだとか、勝手なことを言いはじめた。最後には犯人を見つけて捕まえようなどと、まるで私たちと同じことを言い出した。私はこっそり部屋を抜け戸外に出た。本堂の石段に腰を下ろすとタバコを取り出した。火をつけようとしたところ、近づいて来る足音がする。私は慌ててタバコを隠した。

「私よ」 サキの声だ。サキは無遠慮に横に腰を下ろし、私にジャンケンのチョコキを出す。「みんな言いたいこと言ってるわ。トウコがあやしいってさっき誰かが言ってたわよ」 サキはタバコを箱から一本抜き取る。「なんでそうなるんだよ。そのうち本当に犯人にされそうだよ」 冷血で薄情なつらだ。本気で言ってるのか、冗談で言ってるのか、

どっちとも判別がつかない。「二人とも殺されて、誰が犯人だかわからなくなったわ」
サキがつくため息とともに紫煙が漂う。「犯人は宝にからんでいる。そして私たちはその
犯人を目撃している」「でも犯人の顔までは見なかったわ」私はふうと深く煙を吐く。

「犯人はなぜ洞窟の死体を放置したんだろう？ 片方は穴まで掘って埋めて、もう片方
はそのまま放置。その理由はなに？」「そんなの簡単だわ」サキがふんと鼻で笑った。
「森はやわらかい土だけど、洞窟内は硬い岩盤だわ。洞窟から死体を運び出すのもかなり
大変だし、誰かに目撃されるかもしれない。私たちはたまたま遭遇してしまったけど、縦
横に張りめぐった洞窟の中では、あの死体が発見されることは低かったと思うわ。犯人
もあのまま放置するのが一番いいと考えたんじゃないかしら」バカ面しててもたまには
まともなことを言う。ほんの少しサキの見方が変わる。

「乗船名簿に書かれてた名前は、二人とも偽名だったらしいわ。彼らは泊まったホテルに
も、乗船名簿と同じ偽名で予約していたようよ。そして二人はチェックインした後、別々
に外出している。それは別々に犯人と合い、そして殺されたってことよ」「ホテルに彼ら
の持ち物は残ってなかったの？」「いくつかあったけど、手がかりになるものはなかった
らしいわ。島の外からやって来た観光客はすべて調べがついている。その中にあやしい
と思われるものはいないようよ」

「島の住民が犯人だということも考えられると思うけど」「地主が殺害された日、身元不
明の人物が一人、連絡船でこの島に来ているわ。そして慌ただしくその日の最終便で島
を出ている。とてつもなくあやしいと思わない？ 地主とあの二人を殺したのはこの人
物だと私は思うわ」「でも乗ってきた連絡船には、それらしい人はいなかったと思うけ
ど」また足音が近づいて来た。私とサキはあわててタバコの火を消し、煙を払った。

「捜したよ。ほら、君たちに手紙だ」顧問だった。やばい。タバコを吸ってたのがバ
レたかも知れない。「だ、誰から？」私は平静を装い、顧問に尋ねた。「さあ、差出人の
名前はないね」顧問は封書の裏を見て言うと、それを私に手渡した。「それじゃあ、少
ししたらもどれよ」そう感心なさげにいうと、顧問はもどって行った。

「手紙をわたすためだけに、わざわざ捜しに来たのかしら？」「顔には出さなかったけ
ど、また私たちが危なっかしいことをするんじゃないかと心配なんだと思うわ」サキ
は顧問が去って行った方を見て言った。封書の宛名を見ると、ワープロの文字で私と
サキの名前が表記されている。消印はない。大秦寺の郵便受けに直接入れられたのだら
う。中には一枚の便箋が入っていた。『これ以上深入りすれば生命の保証はない』ワー
プロの文字でそれだけが記されている。

「もしかしてこれって脅迫状？」「犯人があせり出したのかしら？ どうする？」「どう
するって？」「生命がないみたいよ」「それは困るわ」「やめちゃう？」「そんなわけないで
しょ。これは犯人からの挑戦状よ。受けて立ってやろうじゃないの」サキが腕の力こ
ぶを固める。「ねえ、今さっき話してたこと、顧問に聞かれたかしら？」「大丈夫よ。何
話してたかなんてわかりやしないわよ」

脅迫状まで届いたとあっては、呑気に宝探しをしている場合ではない。犯人を捜し出すほうが先だ。私とサキは、サル、ブタ、カップがテントを張る浜辺へと向かった。そして乗り気のない三人をテントから引きずり出し、作戦を練っているときだった。突然サキが立ち上がった。視点のはっきりしない目を暗い海に漂わせている。常々ふつうじゃないやつだとは思っていたが、とうとう狂ってしまったか。

「なに、あれ！」 サキが遠くを指差した。目を凝らすと、沖の無人島に小さな灯りが動いている。「人がいるのかしら？」 サキが興味深げに言う。「でもあの八十島って無人島なんでしょ？」「もしかして犯人がアジトにしてるのかもよ」 サキの声が妙に弾んでいる。私は嫌な予感がし、ずっと存在を消す。

「行ってみない？」 サキが私に顔を向けて言った。やっぱりだ。その笑顔は真昼のように明るい。「どうやって海を渡るっていうのよ」 サキなら泳いで渡るとか言い出しかねない。一キロほどの距離とはいえ、泳いで渡れるわけがない。夜の暗い海は怖ろしく不気味だ。何があるかわからない。腹を空かしたサメとか巨大ダコとかがいたりするかもしれない。

「あれよ」 サキがあごをしゃくった。まさかと思ったが、サキの尖ったあごは砂浜に埋もれかけた木造船を指している。波打ち際まで運び着く前に、バラバラになってしまいそうな代物だ。海面に浮かべられたとしても、途端に浸水するに違いない。そんなのに乗って一キロもの海上を進めるわけがない。それこそ自殺行為だ。

「海水が入ってきたら、かき出せばいいだけのことよ。この辺は遠浅らしいから沈んだとしても何てことないわ」 サキが無茶を言う。「でも五人は定員オーバーって感じだから、私に構わなくていいわ」 そう言って私は一歩さがった。「何いってんのよ。ここまで来て自分だけ逃げようたってそうはいかないからね」「冗談じゃない。あんたとだけはいっしょに死にたくない」「もしかして泳げないとかいうんじゃないでしょうね？」「ちゃんと泳げるわよ。ちょっと苦手なだけよ」

木造船は見た目よりしっかりしていた。五人乗っても大丈夫だった。思ったほどの浸水もなく、かき出すまでの海水も溜まることはなかった。無人島まではおよそ一キロ。サメも巨大ダコも見当たらない。幸いにして波も穏やかだ。サル、ブタ、カップが交代で櫂を漕いだ。サキは呑気に鼻歌を歌い、私はずっと船縁にしがみついていた。

八十島は野球場一個分くらいの小さな島だった。波の穏やかな岩場に木造船を着岸させ、私たちは上陸した。島の周りに他の船はなかった。人の気配もない。雑草が生い茂り、鬱蒼とした木々が密集している。雑木林に入った岩穴に、朽ちかけた地蔵堂があった。かなり古そうだ。誰かがお参りしているとは思えない。

私は地蔵堂の前に座り、タバコに火を点けた。木々の周辺や、雑草の中、岩場なども調べてはみたが、これといった発見はなかった。この島に犯人に繋がるようなものは何もなかった。そもそもこんな暗闇では、何かあっても見つけられるわけがない。それは霊宝山の森の中でも学習したはずだ。なんだかサキに振り回されっぱなしだ。どうにかして早くこの関係を断ち切らねば、もっとひどいことになりそうだ。

私はふうっとタバコの煙を吐き出す。紫煙がもわっと広がりゆっくり薄れていく。風もない。夜だというのに蒸し蒸しする。まったく最悪だ。どこかでパチパチ音がする。何の音だろうと、私はまわりに目を這わす。だがそれと思われるものは何もない。

気のせいか背後が暖かい。私ははっとして振り返った。そこには顔が火だるまになったお地蔵さまがいた。赤いよだれかけが燃え上がっている。腕を広げて伸びをしたとき、指にはさんだタバコがよだれかけに火をつけてしまったのだ。消そうとしてあわてて叩いたところ、もろくなったよだれかけは火の着いたまま外れてしまった。枯れ草の上に落ちたよだれかけの火は、あっというまに大きくなり、朽ちかけた祠に燃え広がった。

慌てふためく私に気づいて、サル、ブタ、カッパが飛んできた。しかし川も泉もなく、どうすることもできなかった。まわりの草木を引き抜き、引火を防ぐことしかできなかった。結局、地蔵堂は全焼し、すすだらけのお地蔵さまだけが残った。

「トウコ、あんた何やってんのよ！　こんなの燃やしちゃって、誰かに気づかれたらどうすんのよ。宝探しどころじゃなくなるじゃない」　サキのキンキン声が、私の脳天をコンコン小突く。「そんな大げさな。ちょっと祠が焼けただけじゃない。こんなところお参りに来る人なんていないだろうし、祠があったかどうかなんて誰もわからないわよ。黒焦げになったお地蔵さん見ても、もともとこうだったとしか思わないわよ」　私は笑ってごまかす。お地蔵さまも微笑んでいる。顔は真っ黒だが怒っているふうには見えない。

「そんなこと言ってんじゃないわよ。もしかしたら、この島全体が燃えてたかもしれないのよ。私たちも丸焦げになってたかもしれないんだから」「悪かったわよ。こんどから気をつけるわ」サキなんかにあやまるのは癪だが、面倒くさいので私は申し訳ないという顔をする。「ちょっと」　突然、サルが抑揚のない声を発した。見ると、サルがお地蔵さまの足下にひれ伏している。こいつお地蔵さまに帰依でもしたのか。

「どうかした？」　私はサキから逃れるように、サルにならってお地蔵さまにひれ伏す。「風が来てる」　間近のサルが私に顔を向けて言った。お地蔵さまの下には、一メートル四方ほどの平たい石が敷かれている。確かにその隙間から、微かな風が感じられる。

これは何かある。ひょっとすると、サキのいう宝が隠されてたりするかもしれない。「ちょっとあんたたち男なんだから、どうにかしてこれを動かしなさいよ」　私は、サル、ブタ、カッパに檄を飛ばす。逃れられないと諦めたか、三人は文句を言うことなく素直に従う。持ち上げてお地蔵さんをどかすと、その土台の敷石をかけ声と共に押した。するとずるずると土台が動いた。そこには人一人が入れるぐらいの岩穴が開いていた。灯りを照らすと、地下のかなり深くまでつづいている。「ほら、私は最初からこのお地蔵さまがあやしいと思ってたんだ」　私はどうだと声を弾ませるが、みんな穴の方に気を取られて、こっちには冷ややかだ。

サル、ブタ、カッパ、私、サキの順で地下に降りる。岩穴を十メートルほど下ったところで、明らかに人の手が入った階段につながった。その階段を約二十メートルほど下りると、こんどは広い空間に出た。そこは自然にできた洞窟のようだ。

最初に目についたのは、観音開きの大きな鉄扉だった。自然の洞窟に取り付けられたその人工的な扉は、どこか違和感がある。全体に浮き出た錆を見ると、かなり古いものだというのがわかる。容易に開けられないよう、扉の表側には大きな南京錠がぶら下がっ

ている。その向こうの通路はどこに続くのか、見えなくなるまで長く伸びている。地蔵堂で岩穴が隠されていたということは、扉はこちら側に来させないためのものなのか。とすれば、人を近づけたくない何かがこちら側にあるということだ。

「誰か来る」 サキが声をひそめる。すぐに私は懐中電燈の明かりを消した。一瞬、先の方の岩肌に小さな光が照り返した。みんな散らばるようにして周囲の岩陰に身を隠す。

あたりは隆起した岩が乱立している。隠れるに事欠かない。

小さく揺れながら、光がこちらに向かってくる。足音が大きくなる。やがて光は鉄扉の前で止まった。鍵を差し込む金属音が響く。そして、ギギギと扉が低い音をたてた。再び足音が鳴り出す。いったい誰だろう？　そしてこんなところに何をしに来たのだろうか？　その人物は、私たちが隠れていることに気づかず、すぐそばを通り過ぎて行った。その瞬間、ランプの灯りに照らされた横顔が見えた。それは同じ連絡船に乗っていた地主の娘、弓月遙香だった。

4

「先生知ってる？　この伊佐良井島から向こうの無人島の八十島まで海の下の地下道でつながってるみたいなのよ」 サキが身を乗り出すようにして医師に言う。「それは初耳だな」 医師は私のおでこの傷を見ながら、興味なさそうに言った。「あれは人工的に掘られたものよ。鉄の扉なんかがあったりして、南京錠がかけられているの。それに、あの無人島、地下にはキリスト教の礼拝所みたいなのがあるのよ。この島の人はなんだか変だわ。なんか隠してるみたいだもの。先生はどう思う？」

「そういえば……」 思い出したように医師が言った。「あの無人島、『八十』と書いて『ヤソ』と読むんだけど、ヤソとはイエス・キリストの呼び名でもあるらしい。それから君たちが寝泊りしている大秦寺。その大秦寺っていうのも昔中国で栄えた景教の寺院と同じ名前だよ」「ケイキョウ？」「景教というのは、東方から中国に広まったキリスト教のことみたいだ」「それが本当だとすると謎は益々深まるわ」 サキがニタリとする。

「でも、そんな似たような言葉や、読み方はけっこうあるもんだと思うよ。そういう似たようなものを、いかにも関係があるように無理にこじつけているのがほとんどなんじゃないかな。君らが見たという礼拝堂だって、実際はそういったものじゃないかもしれない。もしかすると何かを保管するために造られた倉庫ということもあり得る。だからこういうことはもっと慎重になって見極めるべきなんだと僕は思うよ」 医師はまじめな顔を向けて言った。やめろと言われて、おとなしくそれに従うような私たちではない。何しろ女子高生は好奇心が旺盛なのだ。

私たちは二手に分かれることにした。無人島への地下道は、岬の洞窟のどこかからつながっているに違いない。サキ、ブタ、カップは、地下道を見つけに岬の洞窟へ向かっ

た。私とサルは、地主の娘の弓月遥香を見張ることになった。礼拝堂であれ、倉庫であれ、あの八十島の洞窟から、彼女が何かを持ち出したのは事実だ。怪しくないわけがない。その彼女がまたいつ動き出すかわからない。

大秦寺そばの民宿「はたや」では、テントやキャンプ用品の一式、ゴムボートや自転車などの貸し出しも行っている。玄関で声をかけると、アルバイトらしき若い女性が出てきた。サキによると、彼女は三澤良子とって、弓月遥香と同じ大学に通う同級生らしい。今年の春に遊びに来て以来、この伊佐良井島が気に入り、すっかり居着いてしまったのだという。三澤良子は気さくで親切だった。しかし、弓月遥香の友だちであるからには、彼女への注意も怠ってはならない。私とサルは、三澤良子の偵察もかね、「はたや」で一台自転車を借りることにした。

サルが前でペダルを漕ぎ、私は後ろの荷台にまたがる。地主の屋敷へと自転車を走らせた。公道を外れると、道という道のほとんどが舗装されていない。地主の屋敷に着くころには、尻がしびれて感覚がなくなっていた。私はよろよろと荷台から降りる。サルが通りのすみの木陰に自転車を駐めた。このようなどかな島では、断りもなく持っていく者なんていないだろう。屋敷は周囲を高い塀で囲われていた。正面に大きな門があって、まるで武家屋敷のようだ。

「どうする？」サルが不安げな顔で私を見る。「そんなの決まってるじゃない」私はしびれた尻をさすりながら言う。「なにビビってんのよ。こんなことしてる間にも証拠を隠蔽されちゃうかもしれないのよ」私は先に立って大きな門をくぐる。

まだ何か言いたそうなサルだったが、渋々と後をついて来た。門を入ると、みごとな日本庭園が広がっていた。大きな池には立派な石の橋がかかっている。水の中を色鮮やかな鯉が身体をくねらせている。その奥には日本家屋がどっしり構える。部屋の数も多そうだ。遥香を探すのも手間がかかりそうだ。

「こんにちわ」不意にかけられた声に、私は跳びあがるほど驚いた。振り返ると、和服姿の優艶な中年女性が立っていた。弓月遥香の母親だろうか。「こ、こんにちは……、あの、私たちは……」いきなりのことで、私はしどろもどろになる。「遥香のお友だちね？ どうぞ、ご案内しますわ」和服女性はにっこり微笑み、先に立って歩き出した。

あやしまれても仕方がないところだが、私たちへの不審感を持っていないようだ。警戒心が薄く他人を疑わないのは、この土地特有の大ききなのかもしれない。こうなったら、なるようになるだけだ。私は覚悟を決めて和服女性について行く。そのあとを心細そうにサルが追って来る。広い玄関を入り、長い廊下を右と左に曲がってしばらく行くと、重みのありそうなドアの前にたどりついた。日本家屋にあって、どういうわけかこのドアだけが洋風だった。

和服女性がドアをノックする。「はい」弓月遥香と思われる声が返って来た。和服女性がドアを開け、私たちに入るようながす。私はひとつ息を吐いて、部屋に足を踏み入れた。「まあ、適当に座って」机に向かっていた遥香は、椅子をくるりとこちらに回転させた。私たちがやって来ることがわかっていたような落ち着きぶりだ。サルと私は互いに顔を見合い、テーブルの前にかしこまった。

無人島の地下礼拝堂から持ち出した文書はこの部屋にあるだろうか。あるとすればどこだろう。私はぐるっと部屋を見回す。洋風の部屋は派手に飾り付けることなく、シンプルで大人びていた。程なくノックの音がして、さっきの和服女性が紅茶と茶菓子を持って来た。「どうぞ、ごゆっくり」和服女性はテーブルにそのお盆を置くと、にっこり笑って出て行った。

「私たちが来て驚かないのね？」まどろっこしい挨拶を省き、私は弓月遥香をまっすぐに見る。「海賊の宝だといってるのはあなたたちね？どこかで接触するとは思ってたわ。でもさすがに直接訪ねてくるとは思ってなかったけどね」弓月遥香が答える。「成り行きでこうなってしまったのよ。でもどうして私たちが海賊の宝を探しているの？」「ここは退屈で小さな島なのよ。あなたたちはかなり目立ってるわ。だからあまり派手な動きはしない方がいいってことよ」「なるほど、肝に銘じておくわ」私は薄く笑う。

「ところで今の人はお母さん？」私は話を変える。「ええ、そうだけど」「若くてきれいな人ね」「そう言っていただくと母も喜ぶわ」「それにしてもずいぶん立派なお屋敷ね。ここにくらべると私の家なんて犬小屋だわ」「二百年ぐらい前に建てられたそうだけど、ただこの家の先祖が金持ちだったというだけで、私には関係ないことよ」「大秦寺の下の民宿であなたと友だちと会ったわ」「ああ、良子ね。彼女、余程ここが気に入ったみたいだわ」「この島の何に気に入ったのかしら？」「それは彼女に聞いてみることね。私にはわからないわ。――それで今日はどういう用件でいらしたのかしら？」遥香は薄く笑みを浮かべた。

彼女のことを探るのに、あっちこちに話が飛びすぎた。不審がられたかもしれない。しかし、ここにやって来たときより、すでに怪しまれていたはずだ。それなれば、まどろっこしい遠回りなどせず、真っ正面からの突破を試みる方が手っ取り早い。「それじゃあ、率直に言わしてもらおうわ。脅迫状を送ってよこしたのはあなたね？」私は遥香の目をしっかりとらえる。

「脅迫状？なぜ私があなたに脅迫状なんかを送らなければならないの？」遥香は目をパチクリと瞬かせる。「とぼけるならそれでもいいわ。じゃあ訊くけど、この島には海賊の宝が隠されているって話よね。それについてあなたは どう思ってる？」「海賊の宝だって？それと脅迫状とどう関係があるの？」「いいから答えて。海賊の宝についてどう思っているの？」「はっきり言って、あまり興味はないわね」遥香は関心なさそうに答える。

「宝はあると思う？」私は構わず続ける。「それはあくまで噂で現実の話じゃないわ。逆に訊くけど、あなたは海賊の宝とやらが本当にあると思ってるの？」「私は岬の洞窟のどこかに隠されていると思ってる」「あの洞窟なら昔いたずらで探検したことがあるわ」遥香ははぐらかすように遠い目をした。「ずっと奥の方にきれいな泉があって、そこまで行って引き返してきたわ。でも私は運よく帰って来られたけど、一つ間違えれば永遠にあの洞窟の中ってことになってたかもね」遥香はエピソードとして穏やかに語るが、暗に行くなという強い警告がそこに読み取れる。

「あなたのお父さんが殺されたとき、宝の在りかを示した地図がいつしよに盗まれたと聞きましたけど」サルが不躰に横から口を挟む。「私は地図のことなんて知らないわ。それって誰かが面白半分にした話じゃないの？」遥香は気にすることなく答えた。

「靈宝山の森にはキリスト教の十字架があると聞きますが？」 サルは続けて問う。「そんなことはじめて聞くわ。残念ながらこの島にキリスト教の教会はないはずよ」「この島にはキリスト教が伝わっていないと？」「あるのは仏教のお寺だけだわ」 遥香がにやっと口角を上げる。

「私たちは面白い場所であなただけを見かけてるのよ」 のらりくらりとする彼女に私は強く言い放つ。「面白い場所？」「八十島の地下礼拝堂よ」 遥香の顔が一瞬、固まったのを私は見逃さなかった。「私たちは一部始終を見てたのよ。あなたが持って行ったあの巻物はなんなの？」「巻物？ 何のことだかわからないんだけど。何かの間違いじゃない？」 遥香は笑顔をつくるが、どこか不自然に見える。

「診療所の秦野先生が言ってたわ。八十と書いてヤソとも読む。耶蘇とはイエス・キリストの呼び名でもあるって。それから私たちが合宿してるあのお寺、昔、中国で景教と呼ばれたキリスト教の寺院も同じ大秦寺って名前だったらしいわ」「そんなのこじつけもいいところよ。あなたたち、合宿に来たわけでしょ？ それならそんな変なことに興味を持たず、合宿のことだけに専念すべきじゃないかしら？ 余計なことに首を突っ込んでると、いっしょに来た他の人たちに迷惑がかかるんじゃない？」 弓月遥香との談論はここまでだった。しかし収穫はあった。遥香の言葉は耳の痛い部分もあったが、彼女は明らかに嘘をついている。脅迫状の送り主もやっぱり彼女だと思われる。

地主の屋敷を出ると、あたりは暗く、今にも雨が降ってきそうだった。私とサルが帰りを急ごうとしたとき、土塀の向こう側から小柄な人影が出てきた。僧服を着たその人物は、人目を避けるような動きをしている。大秦寺の坊さんだろうか？ しかし寺であのような僧侶は見えていない。坊主に変装した泥棒か？ ひょっとして殺人犯？ 私とサルは目配せすると、自転車をその場に置いて後をつけた。速くで雷が鳴り出した。坊主は畦道を通り、岬の方に向かっている。私たちに気づいている様子はない。

思った通り、岬まで来ると洞窟に入った。岩場の陰にランタンを隠していたようだ。サルが常備携帯しているペンライトを点灯させた。明かりを手で隠しながら足下を照らす。坊主は奥へ奥へと洞窟を進んで行く。足場はあまりよくない。ごつごつした岩の登りが続き、すぐに足がガクガクになる。坊主は慣れているようで、その距離が次第に開いて行く。息が切れてきた。額から汗が流れ落ちる。運動不足だ。こんなことになるなら、もっと部活に励んでおけばよかった。

先に行くランタンの灯りは次第に小さくなり、やがては闇に消えてしまった。私とサルは足を速めたが、道がいくつかに分かれていて、とうとう坊主を見失ってしまった。

かなりの間、歩き続けた。暗くて狭い空間に長時間いると、気がおかしくなってくる。このまま外に出られないのではないかと、洞窟が崩れるのではないかと、余計なことまで考えてしまう。ただのバカなのか、それとも無神経なだけなのか、サルはひたすら歩き続ける。どこか頼りない感じがしていたが、こういう状況では男らしく思えてくるから不思議だ。

そのサルが不意に足を止めた。「なに？」 私は驚いて立ち止まる。「水の音がする」サルが耳を傾けるようにして言う。なるほど、耳を澄ますと流れる水音が微かにする。どこかに地下水が流れているのだろうか。歩くにつれ洞窟内が広がって行く。そして突然、視界に川が現われた。その清流は瀑布となって地中に吸い込まれている。

大きな水瓶のような泉がある。広さはテニスコート二面分ほどだ。雨水が地下水となってここに蓄えられ、それがあふれ川となって流れているのだろう。これがサキや遙香が言っていた蘇りの泉に違いない。のぞき込むと、深さは十メートル以上はあると思われる。まったく濁りがなく、底に沈んだ小石までがはっきりと見えている。

「見てよ」サルが周囲をライトで照らした。私は思わず感嘆の声を上げた。天井にはつらら状の鍾乳石がたれ下がり、床面には石筍が発達している。石柱となったものも見られる。また皿状の石灰華が、段丘のように何段にもなっている。見わたせば、辺りはりっぱな鍾乳洞だった。厳かで神聖な雰囲気が漂う。神仏を信じていない私でさえ、手を合わせたい気分になってくる。

「あんたも吸う？」腰を下ろし、私はタバコを取り出した。サルは首を振り、そばの岩に座る。こうなったらあせっても仕方がない。サルもいることだし、まあどうかななるだろう。「ところであんたたち、どういう目的でこの島にやって来たの？」私はタバコの先に火をつけて言った。「え？」サルは意表を突かれたような顔をする。

「こんな島に男三人で来るなんて、よっぽどのことがあったってことじゃないの？ウミガメの産卵になんか興味なさそうだし、ナンパ目的だとしても女子の観光客なんていないし、ましてや海賊の宝のことは知ってたとも思えないから、宝探してこともあり得ない。いったい目的は何なの？」「ただの観光だけど」「だったら、こんな何もなかったところより、もっと他にいいところがあったでしょう」「人目のつかない静かなところがいいかって思って……」なぜかサルの目が泳ぐ。「気楽でいいわね。無理やり部活の合宿に連れて来られた私とは大違いだ」私はタバコの煙をため息とともに吐き出した。「あんたたちは部活とかやってないの？」「べ、別にやってないけど」サルの目がまた不自然に動く。「いいわね。私なんてとんだ災難だよ。おかげで貴重な夏休みが台なしだ」サルの様子をごどかおかしい。思いつめたような顔をしている。

「あんた、まさか変なこと考えてないでしょうね？」「え？」サルが驚いたように顔を上げた。「こんなところだからって、乱暴しようなんてこと思ってんじゃないでしょうね？」私は目を尖らせる。「ま、まさか、そんなこと考えてもいないよ」サルは声をうわずらせて否定した。「冗談に決まってるでしょ。ほら行くわよ」私はタバコをもみ消し、立ち上がった。

岩に刻まれた「十」という小さな印にサルが気づいた。印象か文字かはわからないが、サキがいう十字架を意味するものなのかもしれない。道が分かれるごとに、それはどれか一方に印されていた。誰かが意図的につけたものと思われる。どこへ導こうとしているのかはわからないが、少なくとも印にしたがってもどれば、出口にたどり着けることに間違いない。気が楽になった私たちは、このまま坊主を追うことを選んだ。そして一時間近く上り続けて行き着いたのは、こちらもやはり出口だった。

洞窟の外は土砂降りだった。薄暗い空から滝のように落ちてくる雨は、大樹の枝葉や剥き出しの岩、雑草の生茂る大地を激しくうちつけていた。そこは霊宝山の頂上付近だと思われた。巨木が鬱蒼とし、若草が一面に生茂っている。よく見ると雑草の中に石畳の道が続いている。それはどう見ても人の手が入ったものだ。それはくねくねと森の

奥へと向かっている。濡れるのもかまわず、私たちは雨の中に飛び出した。しばらく石畳を辿っていくと、目の前に切り立った岩壁が立ちはだかった。

見上げた瞬間、私もサルも言葉を失った。いくらか期待はあったものの、目にしたのはそれを遥かに超えるものだった。威風堂々とそびえ立つ巨大な遺跡が視野いっぱいに広がる。直接岩を削ったその寺院は、大胆さと繊細さを併せ持っていた。ところどころの劣化は見られるが、大きく崩落したところはない。風雨にさらされた痕から、かなり古くからあるものと推測できる。サルと私は互いに顔を見合うと、恐る恐る遺跡の中に足を踏み入れた。

そこそこに広い空間だ。かびっぽい臭いが鼻をつくが、外の蒸し暑さを思えばひんやりして気持ちがいい。崩れた箇所も目立つが、祭壇や十字架はまだ荘厳さを残している。壁に施された模様や飾りは、どこかオリエント的な趣が感じられる。「キ、キリスト教の教会？」興奮で私は声が震えてしまう。「そ、そうみたいだ」サルも声をうわづらせる。「すごい発見だわ。これってどれくらい昔のものかしら？」「キリスト教が日本に伝わったのが、十六世紀くらいだから、古くても五百年前くらいなのかな？」サルは指を折りながら言う。

「これは千五百年前に造られたものだよ」突然、背後からした嘎れた声に、私もサルも飛び上がって驚いた。振り返ると、入口のところにあの坊主が立っていた。その身なりはかなりみすばらしい。着ている僧衣は薄汚れ、至るところ擦り切れている。ほったらかしの頭はタワシみたいに頭髪が伸び、不精ひげもまるでカビが生えたようだ。

「あなた誰？」私は胸の前で拳を固める。「ただの坊主じゃ」小柄な坊主は、懐を探りながらスタスタ近づいてくる。「地主や二人の男を殺したのはあなた？」私とサルは一步二歩と後ずさる。「まさか」坊主は笑いながら台座のようなところにあぐらをかくと、キセルを取り出しマッチで火をつけた。「もしかして、海賊の宝を探してるの？」「そんなもの興味ない」「じゃあ、どうしてこんなところにいるの？」「いたいからいるだけだ」「これってキリスト教の教会でしょ？ そんなところに仏教の坊さんがいるのっておかしくない？」「わしは宗教なんてのにこだわってないからな」坊主はぶうと紫煙を吐く。

「さっき、あなたこれは千五百年前に造られたものだって言ってたけど、そのころキリスト教はまだ日本に伝わってないはずよ。どうして伝わってないものがここにあるの？」「それがここにあるってことは、千五百年前には伝わっていたということだろう」「たしかにこの島にはキリスト教をほのめかすような名前が多く残っているわ。かつてこの島の住民は、キリスト教を信仰してたんじゃないの？」「ひょっとするとそうだったかもしれん」否定するかと思いきや、意外にも坊主は同調する答えをした。

「ねえ、訊いていい？」私は坊主を見る。「なんじゃ？」「なぜ地主の屋敷に忍び込んだの？」そう問うと、坊主が激しく咳き込んだ。「私、見たのよ」「別に忍び込んだわけじゃない。まったく人聞きの悪い」坊主は涙目で苦しげに声を絞り出す。「じゃあ、何してたの？」「あんたには関係ないことじゃ」「ひょっとして泥棒？」「ち、違う」坊主は強く否定する。「じゃあ何で？」「それは言えん」「どうしてよ？」「だからどうしてもだ」坊主はひたいの汗を拭った。

「あっ、そのおでこ！」 私は坊主のひたいを指さした。はっとした坊主はあわてて手で隠す。「合宿所の風呂場のぞいたのあんたね？ そのおでこのタンコブがなによりの証拠よ」 私は坊主をにらみつけた。「いや、それは……」「あんた、のぞき魔でしょ！

白状なさい！」「ち、違う。のぞき魔なんかじゃない。ぐ、偶然だ、たまたま通りかっただけじゃ」「うそ！ このすけべ坊主！ 坊主のくせして女子高生の入浴をのぞくななんてどういうつもりよ！ この煩惱の塊！ 駐在さんに逮捕してもらうから！」「待ってくれ、目立つのはまずい。それだけは勘弁してくれ」 すけべ坊主は拝むように手を合わせる。

この坊主、何やら怪しい。言うことすべてが不可解だ。もしかしてスパイか。あるいは逃亡犯か。問い詰めたとしても、核心のところはそう簡単に吐かないだろう。「それならこれから問うことに答えなさい。でないと逮捕よ。各メディアでも大きく報道してもらうから」「わ、わかった」 すけべ坊主はあきらめたように、小さく肩を落とす。

「あんた、あの屋敷にはよく行くの？」「ちよくちよく行くことはある」「ははあ、奥さん目当てね？ 奥さんは若いし、美人だし、未亡人だし」 私は目を細くし坊主を見る。「ち、違う。そんなんじゃない」 坊主が必死になって否定する。このあわてようからすると、まんざらはずれでもないかもしれない。

「まあ、いいわ。三ヶ月前、地主が殺されたでしょ。その日も屋敷に行った？」「そ、それは……」 坊主は喉に何かを詰ませたように口ごもった。「言いなさい！ でないと訴えるわよ。そしたらあんたなんか、うら若き乙女の裸を見た罪で死刑よ。どうなの？ 行ったのね？」「ああ」 坊主は叱られた子どものようにうなずいた。

「そこでこの島の住人じゃない人を見たわね？」「あんたは殺人犯を突き止めようとしてるようだが、地主の屋敷にいた人物が犯人とは限らない」「そんなこと訊いてないわ。私の尋ねたことだけに答えればいいの。でないと泣くことになるわよ。見たんでしょ、どうなの？」「確かに見た」 坊主は開き直ったように顔を上げた。「何か特徴はなかった？」

私は坊主ににじり寄る。「帽子をかぶって、サングラスをかけて、マスクをした」「変装してたのね。それは男？ 女？」「男だ」「他に特徴は？」「足が悪いようだった。少し引きずって歩いてた」「どっちの足？」「たしか右だった」

5

雨は太陽が昇るころには上がり、空は嘘のように晴れた。小鳥たちがさえずり、森はさわやかな朝を迎えた。昨日は気づかなかったが、森は針葉樹や広葉樹、低木から高木にいたるまで、いろんな植物が共生している。シカやリスも巨樹の陰から顔を出し、こちらをうかがっている。

薄暗い森を抜けると、むき出した岩山があった。のぞき込めば、下は切り立った絶壁になっている。人を拒むような険しい山々は、深い原始の森をつくっている。森は神秘的

だった。私とサルは、坊主と洞窟を抜けた。岬に出ると、坊主は行くところがある、とか言ってどこかに行ってしまった。サルも、ブタとカッパのいる浜辺へもどって行った。

合宿所に帰ると、みんなが境内の掃除をしていた。ババに見つかれば、また面倒なことになる。私は竹箒をバタバタさせているサキを見つけ、素早く本堂の裏に連れ込んだ。「どこ行ってたのよ。ババなんかカンカンよ。あんたを八つ裂きにするって怒り狂ってるわ」サキが一気にまくし立てる。

「それより顧問は？」激昂するサキに構わず、私はまっすぐ向き合って問う。「顧問？

そうそう、そんなことより大変なのよ——」今まで興奮してたのを忘れてしまったかのように、サキは神妙な面持ちで声を潜ませた。

「何が大変だっていうの？」「看護師さんがいなくなっちゃったのよ。もしかしたら誘拐されたかもしれないって。だから顧問もみんなと看護師さんを捜してるんだと思うわ」「それっていつのこと？」「昨日の夕方くらいから誰も見てないって言ってたけど」サキの答えを聞くと、私は足早に歩き出した。

「どうかした？」サキが小走りに追ってくる。「急がなきゃ、大変なことになるかもしれない」「何？どこ行くの？」「そんなの決まってるでしょ」私は振り返り、後ろのサキに言う。「何が決まってるって？」その怒気を含んだ声に、はっとして向き直ると、仁王像のようにババが立ちはだかっていた。

「トウコ、あんた朝帰りとはいい度胸してるじゃないの！今まで何やってたのかじっくり聞かせてもらうから。足のほうはぜんぜん大丈夫そうね。なら、たっぷりとしごいてあげるわ」ババがぞっとする笑みを浮かべる。こいつに関わっていたら日が暮れる。それでは手遅れになってしまう。サキと私は互いに見合うと、行く手を遮るババに向かって突進した。両手を広げ止めようとするババは、くるりと一回転してひっくり返った。サキと私は振り返ることなく、山門をくぐり石段を駆け下りた。「こら、あんたたち、どこ行くの！まだ私の話は終わってないし——。おぼえてらっしゃいよ。後悔しても遅いんだから！」ババの怒号がブスブス背中に刺さった。

電話のほうが早いとは思ったが、サキも私もその番号を知らなかった。大秦寺か民宿ならわかったかも、と気づいたのは、寺を飛び出してからだった。どっちにしろ民宿で借りた自転車が置きっぱなしだ。その自転車を使えば、移動も楽だし時間も短縮できる。そんなわけで、サキと私は地主の屋敷まで走って来たのだった。

「どちら様でしょうか？」返って来たのは遥香の母親の声だった。「昨日、おじゃました者ですが、遥香さんはいますか？」私は門柱のインターホンに顔を近づけて言う。「ああ、遥香のお友だちね。一時間ほど前に先生が見えられて、いっしょにどこかへ出かけられましたよ」遥香の母親は何の疑いも持っていないようだ。顧問は遥香を誘ってどうしようというのだろう。「どこ行ったかわかります？」私は不審を抱かせないように明るく問いかける。「さあ、何も言わずに出て行ったから……」遥香の母親が言い終わらないうちに、私はそばに放置していた民宿の自転車で飛び乗った。

「さあ、早く乗って！」私はあごでサキを急かす。「こんどは、どこいく気？」あわ

ててサキが荷台にまたがる。「そんなの決まってるじゃない、洞窟よ」「また洞窟？」「一足遅かったわ。急がなきゃ」私はペダルを強く踏み込む。「説明してよ」「犯人は地主の娘を狙ってるのよ」「どういうこと？」「宝の在り処を知るのには、あの古文書が必要なの。だから犯人は、それを彼女から奪おうとしてるのよ。八十島に見えたあの小さな灯りは、古文書を探していた犯人のものだったのよ」「その犯人って、いったい誰？」「すぐにわかるわ」

自転車はでこぼこ道を加速し、まとわりつくような風を切って走る。必死にしがみつくとサキは、荷台でピョンピョン跳ねながら悲鳴をあげた。浜辺に着くとサキと私は、テントで熟睡しているサル、ブタ、カッパをたたき起こした。そして、寝起きの三人を連れて、岬の洞窟へと入った。

「地主が殺された前日、この島にやって来た連絡船の乗客で、一人だけ身元がわからない人物がいるらしいわ」サキが早口にしゃべりはじめる。「乗船名簿に書かれた名前と住所はデタラメで、どこのホテルや民宿にも泊まっていない。野宿をしたのか、それとも島に誰か知り合いがいてそこに泊まったのか。その人物は地主が殺されたその日に島を出ているわ」先頭に行く私は、岩に刻まれた目印を見落とさないよう注意しながら進む。

サキは続ける。「その時期、リゾート開発の話が持ち上がっているわ。犯人はそれをうまく利用して、財宝を探し出そうとしたのよ。でも地主はその計画に真っ向から反対した。そこで邪魔な地主を殺害し、洞窟の地図を奪った」「今回殺されたのは、同じ連絡船に乗っていた二人組だけど、ひょっとして……」サルが声を潜めて言う。「そう、彼らがリゾート化を推進する企業の手先だったってわけよ」「じゃあ、その二人は、誰に、なぜ、殺されたっていうの？」ブタが問う。「二人が財宝を手に入れようとしたからじゃない。だから殺された」

「今回、連絡船の乗船名簿に身元がわからない人物はいなかった。ということは、島民の誰かが犯人という可能性が高いのでは？」カッパが言った。「それはないわ」私は足を止め、振り向いて言った。サキが肩にぶつかる。「今回は身元を隠す必要がなかっただけよ。そして泊まる場所を考える必要もなかった」「もしかして、その犯人が誰なのかわかってるの？」鼻を押さえサキが言う。「犯人は地主が殺害される前に右足をケガしていた人物よ」踵を返し、私は再び歩き出す。

そのとき、別の横穴からランタンの灯りが現われた。あまりにも突然で、身を隠す暇もなかった。「あなたたち——」そう声を尖らせたのは遥香だった。診療所の秦野医師もいっしょだ。「先生っていうのは、秦野先生のことだったのね？」私はほっと胸をなで下ろした。確かに、診療所の医師のことも先生と呼ぶ。

「犯人から要求があったのね？」サキは遥香から目を反らさず言う。「これは遊びじゃ

ないのよ。あなたたちには関係ないわ。邪魔をしないで」 遥香は強い口調で言う。

「犯人から連絡があったのね？ 友利子さんを返して欲しいければ、古文書を持って鍾乳洞の泉まで来い、とか」「どうしてそんなことまで——」 遥香が目を見開く。「そんなの容易に想像がつくわ」「あなたたちにかまってる暇はないの。さっさと帰りなさい！」 遥香のこめかみに血管が浮いた。

「まあまあ」 秦野医師が割って入った。「彼女が言ったように、一刻を争っている。これはとても危険なことなんだ。大勢では相手を刺激してしまって、逆に友利子さんを危険にしてしまう。君たちにもまた危険がおよぶかもしれない。君たちには洞窟の出口のところで待っていてほしいんだ。そして僕らがいつまで経っても出て来ないようなら、警察に知らせてくれないだろうか」 医師の諭すようなおだやかな口調に、サキも私も反論できなくなった。 医師は私たちに笑顔を見せると、顔をしかめたままの遥香とともに洞窟の奥へと消えていった。

ランタンの明かりを揺らし、遥香と医師は暗い洞窟をどこまでも進む。どれくらい歩き続けたのか、やがて広い空間に出た。 医師が、乱立する鍾乳石と、浄水を湛えた大きな泉に驚嘆の声をあげた。 遥香はそれらには関心を示さず、数歩前に歩き出ると叫んだ。「そこにいるのはわかってるわ！ 正体はとっくにばれてるわよ。姿を見せたらどうなの？ 広嶋先生！」 遥香の声が洞窟内に反響した。

その余韻の残る中、小さな灯りが揺れた。暗闇から人影が現れた。顧問と看護師の友利子さんだ。顧問は友利子さんの背後に立ち、彼女の喉もとに刃物を突きつけている。「あなたの目的は海賊の宝でしょ？ そのことが記された古文書ならここにあるわ。だから彼女を解放して！」「隠れているやつが他にもいるはずだ。姿をあらわせ」 顧問があたかも見えているかのように、刃先をこちらに向けた。 どうやら気づかれてたようだ。こうなっては仕方がない。腹を決めるしかない。 私は岩陰から出た。サキも横に並ぶ。そしてサル、ブタ、カップも姿を出した。「あなたたち、どうして？ 帰りなさいって言ったでしょ」 遥香が私たちを見て声を荒げた。

「地主とあの二人を殺したのはあなただったのね」 私は遥香を無視して言った。「それ以上近づくな。変なまねをしたら、彼女の命がないぞ！」 顧問は刃を彼女の首に押しつけた。「あなたは宝の在り処を示した地図を奪ったはずよ」「ところがこの地図は欠損していて、この場所までしか知ることができなかったんだ」 顧問は持っていた地図を投げ捨てた。地図はひらひらと地面に落ちた。

「ひとつわからないわ。なぜ友利子さんをさらったりしたの？」「それは彼女が地主の血を引く本当の娘だからだ」 顧問はそう言って、かすかに口角を上げた。「本当の娘？」「友利子さんは、彼女の母親と、地主との間に生まれた本当の子だ」「じゃあ、遥香さんは？」「遥香は地主の後妻の子で、地主との血のつながりはない」

「これからどうする気？」 顧問に気づかれないよう、私は少しずつ近づく。「安心したまえ、君たちも宝の在り処まで連れて行ってあげるよ」「そして、私たちも殺そうっていうわけね？」 顧問が高笑いした。不快な笑い声が鍾乳洞に反響する。

そのとき顧問の持つ刃物が、友利子さんから離れた。友利子さんは逃げようとして身

をよじった。その、顧問がバランスを崩した一瞬を私は見逃さなかった。すかさず飛びつくと、自ら後ろに倒れながら顧問を引き込んだ。そして、その腹部を力いっぱい右足で跳ね上げた。きれいな巴投げだった。顧問は弧を描き、大きな水しぶきをあげて川に落ちた。昨日の豪雨で流れは速かった。急流に浮き沈みしながら、顧問は暗い奈落へと消えて行った。

岩場の洞窟から、ふわっと懐中電灯の光が現われた。月明かりが黒く人影を浮かび上がらせる。その人影は鬱蒼とした森をゆっくりと歩きはじめた。やがて目の前に立ちだかる遺跡の前で足を止めた。懐中電灯の光を上下左右にと動かす。驚嘆している様子がうかがえる。

「それがこの島の秘密よ」 その声にびくりとして彼が振り返った。弓月遙香の持つ懐中電灯がその影を照らした。彼はまぶしそうに手をかざす。その手には焦げ目のある地図が握られている。深くかぶられたフードでその表情は見えない。

「義父や、あの二人を殺したのはあなたなのね？」 遙香は強い口調で言った。そして続けて言う。「奪われた地図には鍾乳洞の泉からしか描かれていなかった。あなたはその泉までの行き方がわからなかった。だから看護師の友利子さんを監禁して、誘拐されたとだまし私を誘い出した。そしてあの泉まで案内させようとした。いろいろ予想外のこともあったけど、あなたはその目的を果たすことができた」 そこで遙香は言葉を切った。彼をじっと見ると、いきなりふっと笑った。「でもねえ、それって宝の場所を示した地図なんかじゃないのよね」 今までの張り詰めた感じはなく、それは砕けた言い方だった。彼は遙香をじっと見つめたまま何も言わない。沈黙が流れる。

そして遙香が口を開いた。「それは先々代の地主が洞窟の中を調べさせたものなのよ。半分しかないのは、あやまって燃やしてしまったからなの。そしてその地図を持っているものが、義父を殺害した犯人。つまりあなたよ。今ここにるのが動かぬ証拠よ」 遙香がまっすぐに彼を指さした。彼は口元に笑みを浮かべ、身構えた。その手にはキラリと光るナイフが握られている。「抵抗しても無駄よ」 遙香は強く言い放った。それを合図に、駐在と町役場、私とサキ、サル、ブタ、カップ、そして僧侶がまわりを取り囲んだ。

遙香が静かに言う。「森の巨樹は寿命を終えると、土へとかえって行く。そして次のものが育ち森を継続する。霊宝に降る雨は森の腐葉土に染み込むと、あの泉に貯えられる。そして浄化され、清水は絶えることなく湧き続ける。それは沢となり深い谷に流れ、やがては海へと帰って行く。そんな森と水の関係が、たくさんの生命を生かし育てている」

遙香は続けた。「祖先が宝としたのはあの泉であり、この霊宝山に広がる原始の森だったのよ。言い伝えられてきた財宝や至宝では決してないわ。あの蘇りの泉によって霊宝の山が潤い、島が生かされている。それを壊してはいけないというメッセージだったのよ。あなたが考えてたような至宝はこの島にはないわ。もう観念したらどう？ 秦野先生」 秦野医師はふっと笑い、するりとナイフを持つ手を下ろした。

子供のころ、洞窟を探検していた顧問は、あやまって地図に火をつけてしまったらしい。火を消そうとあわてたため、「蘇りの泉」の川に落ちてしまったという。そのとき、怪我を一つしなかったということが傲りとなったに違いない。また、泳ぎが得意だという過剰な自信が仇となったのだろう。何よりも、一晩続いた大雨で川の流れが激しくなっていたのが災いとなった。敵を油断させようと自ら川に落ちた顧問だったが、子供のころと状況は明らかに違っていた。自業自得だったとはいえ、彼をぶん投げた手前、私も多少の気まずさは感じてしまう。

「君たちは僕が犯人だと思ってたんだろう？」 ベッドの上で顧問が言った。ギブスで固めた右足を高くつられたその姿は痛々しい。でも足の骨折だけですんで幸いだった。一つ間違えれば、生命を落としかねなかった。総合病院に見舞いに訪れた遥香、友利子さん、町役場、駐在のみんなが顧問の無茶を声をそろえて叱った。誰も同情なんてしていない。

事件が解決し、謎だったことも段々とわかってきた。地主が殺された日、偽名を使い連絡船に乗船したのは、他ならぬ顧問だった。地主から内密の相談を受け、島の人たちにも知られないよう帰省していたとのことだ。乗船名簿に偽名を使ったり、島の人たちにも気づかれないようにしたのは、それだけ切迫した状況にあったということなのだろう。現に地主が殺されていることがそれを示している。地主と顧問が秘密裏に連絡を取り合うほど親密だったわけは、二人が異母兄弟であったからに他ならない。つまり母親が違うが、父親が同じという関係だったのだ。

秦野医師が地主から奪った霊峰洞内の地図は、蘇りの泉までの径路が欠落した不完全なものだった。秦野医師は、遥香にその蘇りの泉まで案内させることが目的だった。その目的が果されれば、遥香の口を封じる怖れもある。そのために顧問は、自分が犯人であるかのような芝居をし、さらにはこっそりついて来ていた私たちをも巻き込んで、秦野医師が凶行に走りにくくなるよう仕向けた。

川に飛び込んだのは顧問のとっさの判断だ。自ら犯人と名乗った顧問が川に落ちて姿を消せば、遥香や友利子さんを手にかける必要もなくなる。顧問の茶番には、秦野医師にそのように思わせる狙いがあったのだ。

友利子さんが監禁されていたのは、八十島の地下礼拝所だった。私とサキが秦野医師に教えたあの場所だ。医師は友利子さんの監禁場所に使えると考えたのだろう。地主を殺した犯人の手がかりが残されているとかなんとか言って、友利子さんが自身の足で地下礼拝所に行くよう仕向けたのだ。そして気づかれないよう後を追い、彼女が地下礼拝所の奥に入ったのを見てこっそり鉄扉の鍵を掛けた。

洞窟内で友利子さんと顔を合わせても平然としていられたのは、拉致した犯人だということを彼女に知られていなかったからだ。だから自分が疑われることはないという確信から、友利子さんを手に掛けることなくそのまま帰すことができたのだ。

顧問が監禁された友利子さんを連れ出すことができたのは、遥香からの指示があったからだった。犯人が単独だと気づいた遥香は、人気のない場所に友利子さんは監禁されていると考えた。そこでまっ先に思い浮かんだのが地下礼拝所だった。遥香は地下礼拝所にいるところを私たちに目撃されている。だから私たちが地下礼拝所のことを、誰

かに話しているに違いないと考えたのだ。とすれば、犯人がどこかでそれを伝え聞いていてもおかしくはない。監禁場所は地下礼拝所に違いないと思った遥香は、医師と合流する前、電話で顧問に知らせたというわけだった。

遥香が秦野医師が犯人だとわかった理由はこうだった。友利子さんを誘拐した犯人の要求は、弓月家が所有する霊峰洞の地図を蘇りの泉まで持って来いというものだった。友利子さんを誘拐し、洞窟の地図の要求をしてきたということは、犯人が彼女を地主の娘と知っていたということだ。ただ、なぜ犯人は秦野医師を仲介役に立てたのか。同じ診療所の医師と看護師だからという理由だけなのだろうか。犯人からすれば、人を介すればそれだけ危険も増すはずだ。

医師が友利子さんの誘拐のことを知ったのは、診療所のポストに入れられた脅迫状からだとされていた。「友利子を預かっている。彼女を返してほしかったら霊峰洞の地図を午前九時までに蘇りの泉まで持ってこい。警察に知らせれば彼女の生命はない」と、このような感じの脅迫文だった。蘇りの泉まで行ければ、その先の地図は手にあるのだから、少なくとも山頂まではたどり着けるわけだ。にもかかわらず、完全な地図を要求したのは、どこか他にも何か隠されていると考えたのだろう。

蘇りの泉に午前九時と指定されていたが、それは診療所の開く時間に合わせたと思われる。友利子さんがいないことを、診療に訪れる人たちに知られたいくなかったに違いない。顔見知りですぐ近所の人たちばかりなので、うまくごまかしたとしても、すぐに本当のことがわかってしまう。しかも殺人事件があったばかりだ。行方不明となれば人が集められ、直ちに捜索がはじめられる。そして、まっ先に捜される一つが霊峰洞であるはずだ。そうなれば犯人は思うように動けなくなる。だから彼女の拉致を知られる前に、犯人のほうから先に動く必要があったのだ。

しかし、早朝どれだけ早く脅迫状を投函したとしても、それを受ける側の次第で、犯人の思惑はずれてしまう。なのに犯人はなぜ、そんな賭けみたいなことをしたのか。もっと確実な方法を選ぶべきではなかったのか。

ところが、七時前というまだ早い時間に、秦野医師は診療所に来て、ポストに入れられた脅迫状を手にとって見ている。それはまるで脅迫状が送られてくることを知っていたかのようだ。犯人はその日、秦野医師がふだんより早く来ることがわかっていたのだろうか。そして友利子さんの日課である郵便物の取り出しを、その日は医師が行うとわかっていたのだろうか。

秦野医師が早く来る理由はなんだったのか。犯人はそれを知っていなければならなかったはずだ。また、友利子さんの誘拐を伝えた遥香への電話で、秦野医師は犯人の不可解ともいえる要求になんの疑問も呈していない。医師は友利子さんと地図との関係を知っていたということなのだ。

一時間も前に洞窟に入った遥香と医師に、私たちが追いつけたのも、彼女が意図的に遠回りして時間を稼いだからだ。その間に顧問は友利子さんを地下礼拝所から救出し、いっしょに蘇りの泉へと先回りしたのだった。

そして殺された二人の男は、伊佐良井島の開発計画を推進する企業の関係者だとわかった。秦野医師は彼らに協力するふりをして、隠された至宝を探し出そうとしていた。ところがその至宝のことを彼らに知られてしまった。そこで秦野医師は分け前の相

談とか言って、欲に目が眩んだ彼らを一人ずつ呼び出し殺害した。

それにしてもこの伊佐良井島は謎に満ちている。イサライとはイスラエルのことを指すらしい。島民の祖先は、遙か昔、シルクロードを通してやって来たキリスト教徒だったのではないだろうか。彼らは民族の至宝を携えて、この島に渡って来たのかもしれない。海賊の宝と言われる由縁は、彼らが大船団を組み、海を渡って来たからなのではないだろうか。

その当時、中国では景教と呼ばれるキリスト教が盛んに信仰されていた。もしこの至宝のことを知ったら、どのようなことをしても奪いに来るかもしれない。そこで彼らは至宝を守るため、表向きを仏教に変えた。そしてその裏では隠れてキリスト教を信仰しつづけた。しかし長い年月が経つうち、次第に裏の信仰は忘れられ、表向きの仏教の教義だけが残った。そして隠されていた真実は、ごく一部の者によって守られ伝えられるようになった。秦野医師とこの島の祖先は、遠い昔に分裂した同じ民族だったのだろう。その至宝を彼は取り返そうとしていたのだ。民族の長い歴史が刻まれた血が、彼にそうさせたのかもしれない。

私たちは、霊宝山の森にある寺院の遺跡と、霊峰洞の蘇りの泉のことを誰にも話さないと約束させられた。もし、それが外に知られたとなると、この絶美の島は心無い人たちによって荒らされてしまうことになるだろう。そんなことは私もサキも望んでいない。あのスケベ僧侶は、霊宝山の秘密を守る隠密みたいな存在だったのだろう。そうやってずっと伊佐良井島を守ってきたのかもしれない。しかしそれでも私はこう思いたい。島民の祖先が持ちこんだ至宝は本当に存在していて、どこかに隠されている、と。

「いろいろ考えてたんだけどさあ——」 私はサキを見る。「あんたとこの島の住人とは繋がりが無いはずだね。でも宝の情報をここへ来る前から知っていた。それってどういうこと？」「急にどうしたっての？」 笑うサキの顔が強ばる。

「あんたの情報源はこの島の住人ではないはず。外からこの島にやって来た人よね。そんな人物が一人だけいるのよね。彼女は一体何者？」「彼女？」「まだとぼける気？ 遙香さんの友だちよ。大秦寺の下の民宿でアルバイトしてる三澤良子のことよ」 私は目をサキから離さない。するとサキは観念したかのように薄く笑った。「よくわかったわね。彼女とは従姉なの。遙香さんとは大学が同じで、遊びに来たこの島が気に入ったみたい。それで大学もそっちのけで、ここにいついちゃったってわけ。というのも本当はいい彼氏ができたからなんだけどさ」「それって、もしかしてチクリン坊？」 私は恐る恐るその名を口にする。サキは何も答えず、ただにやっと笑った。

「初日の夜、墓地で見た人影はあんたの従姉とチクリン坊だったのね」 お化けじゃなかったことにはほっとしたが、それでもなんだか気持ちは複雑だ。「これですっきりした？」「まだ気になることがあるわ」「こんどは何？」 サキは少々うんざりした顔をする。

「この部に入部させられるときのことよ。あんたが私を助けるよう顧問に頼んだとか

言ってたよね？　それはまあいいわ。だけど、あんたはなんで私が物置小屋の裏で、喫煙が見つかったことを知ってるんだ？　物置小屋の裏だなんて具体的なこと、誰も知るはずないんだけど――」「そんなこと言ったかしら？　何かの間違いじゃない？」　サキはとぼけるが、その目は動揺を隠し切れていない。「なんかおかしいと思ったんだよ。チクったのはあんただね？」「いや、だから、タバコは身体によくないと思ったし、それに宝探しにはあんたの協力が必要不可欠だと思ったから――」　まったく言い訳がましい。自分もタバコをスパスパ吸ってるくせに。そしてそんな企みがあったとは、まったく恐れ入る。

「それから合宿の初日、石段から私を突き落としたのもあんただろ？　私の後ろには、あんたしかいなかったんだからね」「あれはわざとじゃないんだよ。眠くて身体も起きてなかったから、運悪く足を踏み外してしまったのよ。たまたまあんたが前にいたもんだからあんなことになっちゃったんだ。でも結果的に練習サボれてよかったでしょ？　私も怪我なく無事だったし――」「素直にそれを喜べるか！」　私はサキのおでこに強烈なゲンコツを食らわしてやった。

島内もなんとなく落ち着き、看護師の友利子さんは総合病院に移った。未だ町役場と駐在は、友利子さんをめぐって熾烈な争いを繰り広げている。　パパにもケガの嘘がばれてしまった。さぼった分みっちり鍛えてやるわ、と言った彼女の目はめらめら燃えていた。合宿はまだ何日も残っている。考えるだけでめまいがしてきそうだ。

それから、サル、ブタ、カッパのことだが、彼らはみんな逃亡犯だった。逃亡犯といっても、部活の合宿所から逃げ出ただけなのだが――。私たちと同じように、部活の合宿に来ていた彼らは、練習に耐えられなくなり、隣のこの島に逃げて来ていたのだ。事件解決の翌日、彼らは捜索隊に見つかって、合宿地である隣の島に連れもどされてしまった。

事件も解決して、なんかつまらなくなった。みんなが寝静まった夜は暇で死にそうだ。だから、また真夜中になったらサキと抜け出そう。そしてサル、ブタ、カッパとつるもう。そういえば、彼らが何部だかまだ訊いていない。　隣の島なんて知れた距離だ。ちょいとがんばればゴムボートで行き来できる。サメもいないし、巨大ダコもいない。波も静かだし、彼らもよろこんで海を渡って来るに違いない。　そして午前四時四十五分、今日もパパの怒鳴り声が響きわたる。

{{-
-}}

十字架の森

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
